
スーパー口ポット対戦

泰貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパー口ボット対戦

【Zコード】

Z0223K

【作者名】

泰貴

【あらすじ】

誤変換から始まったスーパー口ボットとガンダムのフルバトル！
地球へ襲来する伝説のスーパー口ボット軍団と、歴代ガンダムの主人公たちが全面抗争を繰り広げます！
ニューガンダムが！ ストライクフリーダムが！ ダブルオーが！
ゲッターと！ ガオガイガーと！ ジャイアントロボと！
勝つのはどちらか？ 勝たせていいのか！？

プロローグ「出撃！スーパー・ロボット軍団」

「美しいな地球は」

宇宙空間に浮かぶ青い惑星を見て、男はつぶやいた。

「ああ、オレたちの故郷だ」

もう1人の男が静かに答える。闇の中で顔は見えないが、その声は若く、力に満ちていた。

「取り戻しましょう。本来あるべき姿に」

「そう、戦争にばかり明け暮れている連中の手から母なる地球を」
決意に満ちた少年の声が響く。その言葉に男たちは頷きを返す。
「本来、我々の役目は母なる地球を外敵や悪の手から守るもの」

「それを内紛ばかりに明け暮れ、地球を汚すなどあってはいけない愚行だ」

影が現れる。そして、その後ろから続々と新たな影が姿を見せる。

「さあ、行くとしよう……オレたちの地球奪回作戦だ」

地球が徐々に近づいていく。影たちはお互いを見つめ、深く頷いた。その中の1人であるもみ上げの跳ね上がった少年が一際声をはりあげた。

「行こうぜ！ 地球へ！ そして、戦争ばかりしているガンダムどもに見せてやろう！ 真のロボットの使い方ってヤツをな！」

『おう！』

影たちは一斉に別々の方向へ走り出す。その先には数十メートルもの大きさを持つ巨大な影が佇んでいた。

トビア・アロナクスは焦燥感を紛らわせようとコンソールを」と
さら強く叩いた。

「ちー！」

ミサイルがクロスボーンガンダムX3をかすめる。ミノスフキー粒子によって機能しないはずの兵器なのだが、現在彼らが戦っている相手は、その武器を惜しげもなく放つてくる。

『トビア！ 動きを止めるな！ 止まつたらやられやで！』

『了解！』

キンケドウの声がヘルメットを叩く。さらに放たれたミサイルを急加速でかわしながら、トビアは味方の姿を探した。

すでに生き残っているのはキンケドウの乗るクロスボーンガンダムX1改しかいない。木星帝国と戦闘を繰り返した宇宙海賊クロスボーンバンガードの精銳がわずか2機しか残っていないのだ。

『なんてヤツだ！』

『へつへ～！ オレはカイゾクつて響きが大嫌いでな！ お前らみんなぶつ飛ばしてやるぜ！』

警告音がコクピットの響く。トビアが急回避をするとさつきまでX3のいた場所を巨大なビームは通過する。モビルスーツが放てるような威力ではない。戦艦の主砲さえ凌駕する強力なビームであった。

現在、トビアたちが相手をしているのは、明らかにモビルスーツではない機体であった。機動力はモビルスーツと大差がないが、その装甲と攻撃力は明らかにモビルスーツのそれを上回っている。全長六十メートルにも及ぶ巨大な姿を見上げながら、トビアは唇をかんだ。

『お前ら一体何者なんだ！ なぜこんなことを！』

『返してもらいに来たのさ！ オレたちの地球をな！』

聞こえてきたのは威勢のいい少年の声であった。目の前の敵はX1へ向けて、身構える。その構えは、さきほど木星帝国軍ごとこちらのフリント部隊を壊滅させた拡散攻撃のものであった。トビアはX1のそばへX3を接近させる。

『キンケドウさん！ X3の背後へ！』

『すまんトビア！』

X3のエフィールドが全開になる。拡散型とはいえ、その一撃はモビルスーツを粉碎するには十分であった。防御力に劣るX-1を救うため、防御力に優れたX-3で防ごうとしたのである。

『へへん！ そんなもんでこの攻撃を防げるかよ！』
『勝平！ 調子にのつてんじゃねえぞ！』

『そうよ！ 油断しないで！』

少年と少女の声が聞こえた。相手が子供たちであることに驚くヒマもなく、トビアはX3のエフィールドジェネレーターを構える。

『わかつてるよ……くらえ！ ムーンアタック乱れ打ち！』

「おおおおおお！」

身構えた巨体の敵は、頭部に輝く前立てから閃光を放つ。かつて地球を侵略してきた宇宙海賊ガイゾックを撃破し続けた必殺技ムーンアタックである。

そして、その武器操る機体の名はザンボット3。無敵超人の異名を持つ正真正銘のスーパー口ボットであった。

第01話「ソレスター・ビーリング」

ジャブロー基地に到着した青年は、上空を飛ぶウェイブライダーを見上げた。

「エプラスまで？ 総力戦だな」

サングラスを外しながら青年が眉をしかめる。地球連邦軍の軍事拠点であるジャブローは、新たな敵の襲来へ対抗するために田まぐるしく動いていた。

「アムロさん！」

少年の声にアムロが振り返る。纖細な顔立ちをした少年が駆け寄つてくる。その後ろには暗い顔をした若者が立っている。

「キラ！ シン！ 無事だつたか」

アムロはキラの肩を叩く。キラは顔を翳らせるときさく頷いた。「プラントもオープも大変なことになっています。アスランやイザークたちが戦ってくれてますけど……」

「そうか……ロンティオൺも同様だ」

アムロとキラが会話をしていると、シンが無言で近づいてきた。その眼には不満と怒りの色が浮かぶ。

「こんな時になぜオレたちをジャブローに呼び寄せたんですか？ 1機でも戦力は必要なんですよ。それを……」

数日前、地球圏の各勢力の拠点が謎の巨大ロボットによつて攻撃された。モビルスーツとは明らかに違う技術体系を持つた巨大ロボット群は、その圧倒的な破壊力で次々と軍事拠点を破壊し続けている。

「わかっているシン。オレもそれを聞いたりすつもりだ」

アムロがそう言つと、シンはそれ以上何も言えずに唇をかんだ。召集をかけたのは「C.B」と名乗る謎の人物である。彼は驚くべきことに最高命令コードを使い、プラント防衛の任務についていたシンを強制召喚したのであった。

「何者なんですか？　CBつて？」

「さあね。オレも初耳だからな」

エレベーターに乗り込んだ三人は、まっすぐジャブロー最深部を目指す。一説に寄れば核弾頭さえ配備されているといつ区画である。エレベーターが止まり、ドビラが開くと、三人を意外なものが迎えた。

「ハロ？」

それはアムロやアスランがハンドメイドで作り上げたホビー用ロボットのハロであった。足元に転がったハロは、耳をパタパタ動かして彼らを迎える。

「アムロ！　元気力？　キラ、シン、元気力！」

「こらハロ！　勝手に行っちゃダメですう」

少女の声にアムロたちは視線をあげる。通路の向こうから少女が駆け寄つてくるのが見えた。少女はアムロたちの前で立ち止まるし、似合わない敬礼をする。

「はじめましてですう。ミレイナ・ヴァステイと言こますう。皆さんを司令部にお連れするですう」

独特的のイントネーションに戸惑いながら、アムロたちは少女の後についていく。自動床が彼らを運ぶ中、ミレイナが明るい表情で声をかけてきた。

「伝説の二コータイプや最強のコードィネイターに会えてカシケキですう。後で一緒に写真とか撮つてくれるですか？」

「あ、ああ……それはかまわないが」

「オイ、アンタ！　どういうつもりだよ！」

そのノリについていけないシンがたまらず声をあげた。するとミレイナはキヨトンとした顔で首をかしげる？

「どういうつもり？」

「そうだよ。オレたちには任務があつたんだ。それを強制でこんなところにまで呼び出してどういうつもりなんだよ！」

シンの剣幕にミレイナが怯えた表情になる。アムロの腕をつかみ、

ミレイナはその後ろに隠れた。

「」「怖いです。それにミレイナにそんなこと言われても困ります。ミレイナはスメラギさんに案内を頼まれただけです」

「スメラギ？」

新たな名前にキラが反応する。アムロは大人の余裕を見せて、シンをなだめにかかった。

「落ち着けシン。こんな女の子が事情を知っているとは思えない。まずは相手の出方を待とう。器の小さな真似をするな」

「で……でも、アムロさん！」

アムロにたしなめられ、シンが不満の声をもらした。だが、怯えたミレイナを観て、シンは口をつぐんだ。

「つ、着いたです！ 事情はスメラギさんに聞いてくださいですう！」

自動床が止まるとミレイナが慌ててドアを開く。アムロたちは最深部にある司令ルームへと足を踏み入れた。

司令ルームには2人の人物が待ち受けていた。長髪をなびかせた妙齢の美女と暗い目をした青年がアムロたちを見つめている。

「はじめましてアムロ・レイ、キラ・ヤマト、シン・アスカ。急な召集に応じてくださって感謝します」

「キミがCBなのか？」

アムロの言葉に美女が微笑む。

「我々はソレスター・ビーリング。あなた方はこの未曾有の事態を收拾するためにヴェーダより選ばれたのです」

第02話「強襲！ スーパーロボット軍団」

女は自身をスメラギ・李・ノリエガと名乗った。その奇妙な響きからアムロたちは直感的にその名が偽名に過ぎないことを悟る。しかし、それには何も言わず、アムロは彼女の話を聞くことにした。

「現在、地球圏は恐るべき力を持つた鋼鉄の巨人……スーパーロボットたちによつて攻撃されています」

「ああ、我々の機体とは明らかに違う系統のロボットが、世界各地に出没している。まつたく未知の武器によつて、すでに連邦、ジオングなど各国の兵力は甚大な損害を受けている」

アムロの言葉にスメラギは頷く。そして、司令ルームのコンソールを操作し、地球圏全域の地図を表示させる。

「現在、火星では武術のようなものを使うロボットによつて、火星開拓団が攻撃を受けています。そして、北米では雷を使う黒いロボット。中国では三機の戦闘機が合体変形するロボットがそれぞれ政府軍を壊滅状態に追い込んでいます」

「連中の目的は何なんだ？ 世界中の軍を相手に戦争を仕掛けている」

「ヤツらの目的は簡単だ。世界のありとあらゆる戦力を殲滅し、地球人類を統一すること」

アムロの問いに暗い目をした少年が答える。シンとキラは自分とあまり歳の違わないであろう少年に、改めて奇異の視線を向ける。

「オレはソレスター・ビーリングのガンダムマイスター、刹那・F・セイエイだ」

「ガンダム……マイスター？」

「ガンダムパイロットのようなものと考えてください。我々はガンダムに乗る人間のことをそう呼びます」

シンの疑問にスメラギが答えた。刹那はコンソールを操作し、世界各地の状況を次々と映し出す。

「すでにニコ・ヨーク、モスクワ、パリ、ロンドンは壊滅状態。ヤツらは強い。オレたちの常識を超えるほどにな」「勝てないというの？」

キラの不安げな声に刹那は静かに首をふった。

「可能性はけして高くはないが、ただひとつだけ勝利する方法がある。それを、ヴェーダが……いや、ティエリアが導き出した」

「ティエリア？」

キラが首をかしげる。しかし、刹那はあえてそのことに言及せず、地図から一つのポイントを示す。

「ヤツらはここに特殊なエネルギー場を建設した。そこで地球上のどのエネルギーにも該当しない未知のエネルギーを精製している。オレたちガンダムマイスターが調査した結果、連中のロボットはそこでエネルギー補給や補修を行っている」

「つまり、連中の本拠地というわけか……」

「だつたらそこを叩けば！」

シンが勢い込んで叫ぶ。だが、刹那が静かに首をふる。

「敵のロボット軍団が大量に待ち受ける場所だ。一機でさえ一軍団を壊滅できる機体が集まっている場所をどうやって叩ける？」

「……」

シンが拳を握り締める。その悔しい気持ちを察し、アムロが彼の肩に手を当てる。

「シン、スマラギ女史の話を聞こう。おそらく、オレたちを集めたのはそのためだ」

「ええ……」

スマラギはコンソールを操作し、モニター表示を変更する。そこにはアムロやシン、キラの顔が映し出される。

「これは？」

「現在、世界中にあるHース級パイロットのデータです。そのデータからヴェーダが選び出したトップ中のトップ。それがアナタたちなのです」

「つまり、オレたちなら敵の拠点を破壊できると？」

アムロの言葉にスメラギが顔を曇らせる。

「本来なら圧倒的大群で攻撃をすべきです。しかし、この状況では、大兵力を集める余裕はありません。各国とも防衛で手一杯なのですから」

「つまり、敵主力を各国にひきつけ、手薄な本拠を少數のエース部隊で的一点突破というわけ？」

スメラギが頷く。キラはシンと顔を見合させる。

「たつた三人……そつちの刹那つてヤツを入れても四人で攻撃するのか？ 勝てるわけないだろ！」

「現在、ヴェーダの総力を挙げてエースパイロットたちを集めています。ヴェーダの計算では十人のパイロットが揃えば、突破可能です」

「可能……か。スメラギ女史、成功確率は？」

アムロが質問する。そここの言葉にスメラギの顔を明らかに翳った。「2・7パーセント。これは上限値です」

「たつた2・7パーセントか……」

「冗談じゃない！ そんな確率の低い賭けにのれるもんか！」

シンがスメラギにかみつく。しかし、キラがそれを制する。

「おそらく、これ以上に確率の高い作戦はないんだろうね。わかつた。ボクはこの作戦に参加します」

「キラさん！」

隣にいたアムロも頷く。シンはキラとアムロの顔をしばし見比べ、ため息をつく。

「わかったよ……オレもやるよ」

「ありがとう。皆さん」

スメラギがやっと微笑んだ。そして、細かい作戦計画を彼女が話そうとした瞬間、ジャブローを巨大な震動が揺るがす。

「！」

「なんだ！ 地震か！？」

刹那がすぐに近くの通信機にとりつく。そして、急いで口調で何か言葉をやりとりすると、インカムをたたきつけるように置いた。

「ジャブロー上空にスーパー・ロボットが三機。先を越されたぞスメラギ・李・ノリエガ」

「そんな……」

スメラギが絶句する横をアムロたちが駆け出していた。

第03話「その男、破風万丈」

「来た来た来た。さあて、ハデに行くとしようか！」

破風万丈は接近してくるモビルスーツ部隊を見下ろしながら、指の骨を鳴らした。連邦軍の可変モビルスーツ以外にも、リガ・ミリティアや地球連合などのモビルスーツの姿が見える。それらを睥睨し、万丈は口を緩める。

「忍くん！ 洗くん！ まずはボクからいかせてもらひうよー！」

『了解です！』

『俺たちの獲物も残してくれよー！』

左右に飛行している一機のスーパー・ロボットから通信が入つてくる。それを聞きながら、万丈は自らが操るスーパー・ロボット・ダイターン3を前進させた。

『まずはお約束をやらせてもらおうか』

そう呟くと万丈は、外部マイクをオンにして、大音声をはりあげた。

『世のため！ 人のため！ 地球の未来を救うダイターン3！ この日輪の恐れぬなら！ かかつてこい！』

ジャブロー上空に万丈の声が響き渡る。その圧倒的な威圧感に氣おされて、迎撃モビルスーシツの足が止まる。

『まずは先手必勝といこう！ 今必殺の！ サン！ アタアアアアアック！』

ダイターン3の頭部から文字通り日輪の輝きにも似た閃光がほとばしる。その光を浴び、迎撃部隊は瞬く間に火球へと変わっていく。

『さすがはダイターン3だぜ！ ジャあ、オレたちもやああつてやるぜ！』

ダイターン3の先制から逃れたモビルスーツへ向かつて、黒い巨体が動き出す。藤原忍ら獣戦機隊が乗り込むスーパー・ロボット・ダンクーガである。

『俺も負けてはいませんよ！』

そう言つてひびき洸は自らの愛機ライディーンを前進させた。飛来する迎撃部隊に対し、ライディーンはその腕に備わつている弓を構えた。そして、無数の光の矢がその腕より放たれる。

『くそ！』

光の矢を何とかかわしながら、アレルヤ・ハブティーズムが舌打ちをする。ソレスター・ビーリングのガンダムマイスターの一角である彼でさえ、この圧倒的な矢の雨には接近もできない。

『アレルヤ！ 下がれ！』

地上からロックオン・ストラトスの通信が入る。見下ろすと、そこには彼の乗るケルディムガンダムがビームライフルを構えているのが見えた。

『ロックオン・ストラトス！ 狙い打つぜ！』

『させるかよ！ 断空砲！ フォーメーションだ！』

忍の声とともに、ダンクーガより閃光が迸る。その威力を察知したロックオンは、すぐさま攻撃を中断し、シールドを展開しながら回避行動に移った。

『さすがはスーパー・ロボットだぜ！ トンデモねえな』

『敵を分断しよう。固まられては手がつけられない！』

アレルヤがアリオスガンダムでライディーンを牽制する。だが、そうしている間にも万丈の駆るダイターン3が連邦軍のモビルスルツ部隊を蹴散らしていく。

『口輪を恐れぬ勇気はたいしたものだ！ だが、このダイターンを甘く見てもらつては困るな！』

『そうかい！』

『！』

ダイターン3の持つジャベリンが半ばで両断される。その機影を見た万丈の顔は、驚きよりも喜びに彩られた。

『来たな！ 主役の登場だ！』

シンの乗るデステイニー・ガンダムがアロンダイトをふりかぶる。

だが、今度はダイターンのザンバーによつてその刀身は止められてしまう。

『シン！』

『フィン・ファンネル！』

キラのストライクフリーダムとアムロのニコーガンダムが同時に攻撃を開始した。ドラグーンとフィン・ファンネルが飛来し、ダイターンを蜂の巣にすべく攻撃する。

『フン！』

万丈の気合と共にダイターンは巨大な扇を取り出す。そして、その扇の起こす突風によつて、ドラグーンとフィン・ファンネルは木の葉のように吹き飛ばされる。

『何だと？』

『このダイターンは日輪の王者！ 太陽にケンカを売るつもりでかかるつてこい！』

ケタ違いの強さを見せつけたダイターンは、歌舞伎の見栄を切るようにポーズをきめた。常識外れの光景に、さすがのエースたちも言葉がない。

「む？」

「コクピット内の通信機がアラームを鳴らす。回線を開ぐと、甲高い青年の声が聞こえてきた。

『こちら甲児！ 万丈さん、聞こえているか！』

『どうしたんだい甲児くん。こちらの演目はまさに真打登場といふところなんだがね』

『へへ！ すまねえ万丈さん。例のモノが完成したんで知らせたくつてさ』

甲児の言葉に万丈はニヤリと笑つた。

『なるほど、だつたら準備万端というわけだ』

『ああ、いつでも始められるぜ！ じゃあな』

そういう残して甲児からの通信は切れた。万丈は目の前にいるガンドムたちを眺め、ふつと口を緩める。

アムロたちは動きの止まつたダイターンへ攻撃をしかけるべきか逡巡していた。万丈は外部マイクをオンにして、彼らに声をかける。

『急用ができた。すまないが、決着は後日としよう』

『？ どういうことだ』

アムロが訝しげに眉をひそめる。万丈はイヤ／＼さえ見える大仰なしぐさを見せた。

『何、この戦いを手っ取り早く終わらせるいい手段ができたんでね』

『いい手段だと！ そんなことさせるかよ！』

直情な性格のシンがデスティニーを突出させる。背後から切りかかったアロンダイトの刃をダイターンは振り返りもせずにザンバーで受け止める。

『……バカな』

『落ち着きたまえ。この決着方法はキミのひとつでも悪い話ではないよ。お互い、無駄な血を流すのは本意ではあるまい？』

『信じられるかよ！』

シンが再び攻撃を開始する。しかし、ダイターン③は繰り出されたアロンダイトの刀身をあわうとか手でつかみとつてしまつ。

『いい加減にしないか……今ここでジャブローをマグマの海に変えてもいいのだぞ？』

万丈の声はゾッとするほど冷たかつた。もし、この男に恋人がいてもそれを平然と見捨てることができる。そんなことを確信させた冷たさである。

『わかった……我々はキミらの撤退を邪魔しない』

『話のわかる相手で助かるよアムロ大尉。では、後でメッセンジャーを送る』

そう言つてデスティニー・ガンダムを振り払い、ダイターン③が上昇していく。それに呼応してダンクーガとライディーンも離脱に入る。なおも攻撃しようとする防衛部隊にアムロは、攻撃停止を命令した。

『メッセンジャーか……何を仕掛けてくるスーパー・ロボット』

半ば地獄と化したジャブロー基地で、アムロの心はかつてない戦いの予感を告げていた。

第04話「挑戦状、来る」

「どうして連中を行かせたんです！　追撃すべきでした！」

ジャブロー基地に到着したカミーユ・ビダンは開口一番にアムロたちを批難した。後ろで黙つているジュードー・アーシタも顔に不満の色を表している。

「現在の戦力では彼らに太刀打ちできなかつた。ボクらはともかく、ほかの兵士たちの損害が大きすぎる」

「それでも……」

カミーユが唇をかむ。彼のいたグリーンノアはスーパー・ロボットの1つコン・バトラーVによつて完全に破壊され、ファをはじめ多くの仲間たちの行方が知れない。

「連中のスーパー・ロボットは油断ならない相手だ。遭遇戦ではまず勝ち目がない。こちらも万全の準備を整えなくては」

「それでオレのZZとカミーユさんのZが必要つてわけですか？」

ジュードーが口を開く。するとスマラギが彼らの間に入つた。

「そう、グリップス戦役とネオ・ジオン抗争を生き延びた最強のガンダムタイプが必要なの。我々は一刻も早く、スーパー・ロボットに対抗できる戦力を集結させなくては……」

「なるほど、わかつたよ。おっぱいのお姉さん」

「おっぱい……え？」

ジュードーが笑みを浮かべる。スマラギは一瞬言葉に詰まる。

「でもさ、戦力を集めている間に地球がボロボロにされたら意味がないんじゃないの？」

「そう……オレたちもその可能性は考えた」

アムロが司令ルームのモニターを見上げる。そこにはスーパー・ロボットによる攻撃の被害が表示されている。

「先日のジャブロー攻撃以降、彼らの攻撃はパツタリ途絶えているんだ」

万丈らによるジャブロー攻撃を最後に、スーパー口ボット軍団は各国への攻撃を停止させた。そして、彼らはスマラギラが示したエネルギーポイントに集結しているのである。

「敵さん、何を考えてるんだろうね」

「わからないわ。しかし、敵が攻勢を仕掛けでこない以上、こちちは一息つける。現在、連邦軍やザフトなど世界各国の軍による合同

攻撃計画が準備中よ」

スマラギの説明にアムロたちがうなづく。理由はどうあれ相手が動きを止めているのはチャンスである。その間に、地球圏すべての戦力を集結させ、決戦を挑む。これはきわめて妥当な作戦であった。

「無駄なことをするのはやめたほうがいいぜ」

「！」

聞き覚えのない声が室内に響いた。驚いて振り向くと部屋の片隅に見知らぬコートの男が立っている。

「誰だ貴様！」

「名乗るほどのモノじゃない……ただ、人はこう呼ぶ。神隼人と…

…」

男はクールな笑みを浮かべる。シンとアムロがホルスターに手をあてるが、隼人はポケットに手を入れたまま動かない。

「あの男が言っていたメッセンジャーか？」

「ああ、このオレをメッセンジャーに仕えるのは万丈しかいねえ」

隼人が自嘲げに笑う。いつでも拘束できるように見えるが、この男の全身に漂う雰囲気がアムロたちを足止めしている。ニュータイプの勘が告げるのだ。危険だと。

「万丈から……いや、オレたちからのメッセージだ。全ガンダムパイロットの中から10名を選びすぐれ。そして、オレたちが待つ場所へ來い」

隼人の言葉にスマラギは背筋を凍らせる。10名という数字はヴァーダが弾き出した作戦遂行可能な人数と同じである。スマラギはモニターを振り返り、かつてティエリアと呼ばれた青年の顔を思い

出す。

「10人だ。9人でも11人でもなく、10人。余計な連中はすべて叩き潰す」

「なんだと！」

隼人の言葉にシンが食つて掛かる。しかし、隼人は動じたふうもなく、言葉を続ける。

「今までの戦闘を考えてみる。貴様らのジムやザクがオレたちに勝てるか？ 数をそろえても蹴散らされるのがオチだぜ？」

「……」

全員が沈黙する。たしかに並の量産機ではスーパーロボットたちに蹴散らされるだけである。物量で押せば勝てるかもしれないが、その損害はすさまじいものになるだろう。

「だから、10人だ。こちらも10機のスーパーロボットを用意する。そして、双方が激突して、生き残ったほうが地球の命運を決める。分のいい話だと思うがな」

隼人がアムロに笑いかける。大量のスーパーロボットを相手にするよりは、精鋭部隊で10機を相手にするほうが遥かに楽だ。しかし、スマラギの脳裏には不審感が渦巻く。こちらが圧倒的に有利な条件を申し出る隼人たちの意図がわからない。アムロたちが敗北したところで、各國政府は降伏などしないであろう。つまり、彼らには何のメリットもないのだ。

「依存はないよ。では、オレは帰らせてもらおう」

隼人がコートの襟を立てる。それと同時にドアが開き、完全武装の兵士たちが雪崩れ込む。

「ジエリド中尉！」

「動くなよスーパーロボットの兄さん！ いろいろ貴様には聞きたいことがある」

ジエリドが銃口を隼人に向ける。兵士たちもライフルの照準をハヤトの急所に合わせる。しかし、隼人の表情は変わらない。

「……！」

いきなり地面が揺れた。突然の地震に兵士たちがざわめく。

「！ なにい！」

司令ルームの床に亀裂が入る。そして、地中から真っ白く鋭いものが出現した。

「こ、こいつは！」

「スーパー・ロボット！」

「そうさ！ こいつが真・ゲッター2だ」

ドリルを装備した白いロボットは天井を突き破つて上昇する。いつの間につかまつたのか、隼人がその頭部の横に立つていた。

「戦いは一週間後だ。最強の10人をそろえてこい！」

そう言い残し、真・ゲッター2に乗り込む。ジャブロー司令部を破壊され、隼人を取り逃がしたアムロたちは呆然と真・ゲッター2の作った穴を見つめていた。

第05話「地球がリングだ！ 出現巨大闘技場」

その場所を遠目で見た人は、古代ローマの闘技場と疑いもなく言うだろう。

その場所を近くで見た人は、巨人たちの試練場と畏怖をこめて言うだろう。

その場所に入った人は、この世の地獄と怯えながらつぶやくだろう。

直径数キロの巨大闘技場。グランドキャニオンの名で知られる地に作り上げられた巨大な建造物へ、今地球の命運をかけてガンダムたちが向かっている。

機数はちょうど10機。彼らはエネルギーの消費を抑えるため、ガルダ級大型輸送機アムドムラに搭載され、戦場へと運ばれていく。「しかし、たった10機で大丈夫なのかな」

ドリンクを飲みながら、ジュドーがつぶやく。その言葉に近くで読書をしていたカミーユが答えた。

「命令だからな。不本意でも従わないとか」

「そつか、カミーユさんは一応エウーゴの人だもんね。軍人さんは大変だ」

「お前も、一応エウーゴなんだがな」

神隼人の申し出を世界各国政府は受諾した。それは正直に世界の命運をこの戦いに託すという意味ではない。反抗作戦のための時間稼ぎとして利用しようとしているのである。

「時間稼ぎってことは捨て駒だろ？ なんでオレたちが……」

「イチイチ口数の多いヤツだな」

部屋の片隅で座禅を組んでいたマントの男が眼を閉じたまま口を開いた。コロニー格闘技のチャンピオンであり、第13回ガンダムファイト優勝者であるドモン・カッシュである。

「強敵と闘えれば満足のドモンさんとオレは違つんですよ
ジユードーが口を尖らせる。すると、彼の正面に座っていたタンク
トップの少年が暗い目を向ける。

「オレは捨て駒でも構わない。それで勝利の確率が1%でもあがる
なら、オレの命など安いものだ」

あまりの価値観の違いに、ジユードーは天を仰いだ。少年の名はヒ
イロ・ユイ。破壊工作のスペシャリストとして、数々の戦場を生き
残ったプロ中のプロである。

「時間稼ぎでもいいんじゃないの？ オレはギヤラスをちやんと払つ
てくれれば満足だぜ。ボーナスがつくとさらに満足」

明るい声を発したのはガロード・ランである。フリー・ランスのモ
ビルスーン乗りとして活躍していた彼は、若いながら幾多の戦場を
駆けた猛者だった。

「しかし、10機同士で何をする気なのでしょうか？ 戰技場で1
対1で戦つたりするとか？」

褐色の少年が首をかしげる。彼はムーンレイスの女王ディアナ・
ソレルの推挙で選ばれたロラン・セアックだった。彼の乗るターン
エーガンダムは、性能で言えば全ガンダム中最強との呼び声も高い。

「1対1なら望むところだ。流派東方不敗の技を見せてやる」

ドモンの声には自信がみなぎっている。ほかの面々も戦闘に関し
てはそれなりの自信があるらしく、無言ながら表情は明るい。

休憩室のドアが開く。軍服姿のアムロが姿を現す。

「あと10分で到着する。各自、ガンダムへ乗り込んでくれ

『了解』

9人のパイロットが同時に返事を返す。アムロは緊張した面持ち
で彼らの顔を見つめた。

グランドキャニオンに建設された巨大闘技場の中央には1人の男

が立っていた。

秀麗な顔立ちと趣味のいい黒いスーツをソツなく着こなす姿は、戦士というよりも芸術家か俳優と言つたほうが似つかわしい。だが、全身からあふれる雰囲気は、見るものをたじろがせるに十分な風格と気品を兼ね備えている。

闘技場に降り立つた10機のガンダムを見上げ、男はここやかに笑う。それは今から死闘を繰り広げる相手とは思えないほどやわやかで、落ち着いていた。

「諸君、お初にお目にかかる。この戦いの案内役を務めることになったクライン・サンドマンだ」

男はそう言つと、懇懃な礼をする。その挙措はまるで無駄がなく、その動作が彼だけのものようであった。

「これからキミたち10名は、我々スーパー・ロボット軍団が用意した10名の代表と戦つてもらひ」

「望むところだ」

ドモンの言葉にサンドマンはにこやかな微笑を返す。その笑顔に氣をそがれたドモンは黙り込む。

「しかし、ただ1対1を10回繰り返すのも芸がない。そこで2対2のタッグマッチを5戦行うことにする」

サンドマンの言葉に、10名のガンダムパイロットは思わずお互の機体をみやる。タッグマッチというならば、コンビネーションが重要である。だが、個人的な繋がりのほとんどない彼らには、息の合つたコンビネーションなど望むべくもない。

「先鋒、次鋒、中堅、副将、大将の5戦というわけだよ。この戦いで勝利数が多いほうが、この地球圏を手に入れる」

「……」

サンドマンの説明にアムロたちは何も言わない。サンドマンは満足したようにうなづくと、言葉を続けた。

「戦闘のルールはシンプルだ。相手が降伏するか戦闘不能になれば勝利。どちらかのチームが2機とも戦闘不能になつた時点で、戦闘

は終了する。反則は3機以上で戦うことだ

「……すいぶんわかりやすいんだな」

ヒイロが冷たい瞳でサンドマンをにらみつける。だが、その視線を意に介したふうもなく、サンドマンは持っていたステッキを掲げ、闘技場の端々を指し示す。

「戦闘はこの闘技場では行わない。ここは言わばキミらの控え部屋とこいつわけだよ。ここから闘技場に作られた空間ゲートから真の闘技場に向かってもらう。ゲートを通過るのは2機だけだ。それ以上は、超重力で機体が破壊される。試すのは勝手だが、やめておきたまえと忠告しておこう」「うーん

サンドマンがステッキで示した場所の空間がゆがむ、するとそこには奇妙なゆらぎが生まれた。

「さて、第一の闘技場はあそここのゲートの向こうだ。誰が行くか決めたまえ」

サンドマンの言葉に、アムロたちは視線を交わす。相手の実力がまだ分からぬ以上、この先鋒戦は重要な意味を持つのである。

「オレが行こう」

「んじやオレも。先手必勝、早い者勝ちってね」

10人のパイロットから2人が歩み出る。ヒイロ・ユイとガロード・ランである。

「ヒイロ……」

「アムロ・レイ。お前の言いたいことは理解している。オレたちの闘いを見て、これから闘いの参考にしてくれ」

そう言い残すとヒイロは愛機ウイングゼロカスタムへ向かっていく。ガロードはおどけた笑顔を見せて、アムロへ歩み寄る。

「じゃあ、行つてくるよ。でさ、アムロさんに頼みがあるんだけどれ」

「なんだガロード？」

アムロが聞き返すと、ガロードがかすかに顔を俯けさせた。

「オレに……オレに何かあつたら報酬はティファにやつてくれない

?

「……ああ」

アムロの言葉を聞いたガロードはいつもの笑顔に戻る。そして、自らのガンダムであるガンダムWXへと走り去った。

「ヒイロ・ゴイ！ ガンダムウイングゼロカスタム、出る！」

「ガロード・ラン！ ダブルエッグス、行くぜえ！」

2機のガンダムがゲートの向こうに消える。アムロたちはそのバ

ーニア光を真摯な眼差しで見送った。

第06話「激突！ 鉄人VSウイングゼロ」

ゲートの中に入ったガロードとヒイロは、自分の平衡感覚が急速に狂つていくのを感じた。宇宙での戦闘を経験していた2人はすぐさま感覚を切り替えようとするが、次の瞬間、再び重力が彼らの体をシートに押さえつける。

「くつ！」

閃光がコクピットを満たす。気がつくと、閃光は收まり、今度は赤い光が彼らの視界を染めた。

「……夕日か」

ヒイロがつぶやく。ようやく平静を取り戻した彼らの視界には、赤い夕日に染まる市街地が広がっていた。

「どこだよ。ここは？」

ガロードがダブルエックスのGPSシステムを使って位置を確認する。

「東アジア地区。上海か……」

かつて中国最大の貿易都市であつた街である。連邦制へ移行した今でもその繁栄は続き、ネオホンコンに比肩する大都市として知られていた。

「ここが闘技場というわけか」

ヒイロは油断なく周囲へ気を配っている。市街地ならば、どこから敵が来るかわからない。バスター・ライフルをいつでも発射できる体勢にして、彼は敵の姿を探す。

「！」

コクピットがかすかに揺れた。ヒイロとガロードの顔に緊張が走る。そして、次は遠くから爆音が響くのが聞こえる。

「空か！」

「陸だ！」

2人が同時に声をあげる。赤く染まつた空の彼方から蒼い巨体が、

上海のビルの間から灰色の巨体が姿を見せた。

「あれは！」

闘技場の空中に浮かんだ映像で上海の様子を見ていたアムロたちが声をあげる。サンドマンは前髪をかきあげ、誇らしげに両手を広げた。

「紹介しよう。第一闘技場で彼らが戦う相手を！」

映像が相手へと近づいていく。蒼く輝く装甲と中世の西洋兜を思わせる頭部に輝く瞳。それはひどくアナクロな印象を与えていた。

「鉄人28号！」

サンドマンの声が終わると再び映像が変わる。精悍な顔立ちとエジプトのファラオを思わせる頭部。そして、異常に巨大な肩が眼を引く巨体が上海を揺るがして前進していた。

「ジャイアントロボ！」

映像は上海の一角にある小高い丘に変わる。そこには腕時計を構えた半ズボンの少年と、操縦機を持った同じ年ほどの少年が自信に満ちた顔で立っていた。

「操縦者は金田正太郎！ 草間大作！」

ヒィロの乗るゼロカスタムがジャイアントロボと対峙する。30メートルを越えるジャイアントロボの巨体を前にしては、ゼロカスタムはまるで子供に見えた。

ガロードのほうは、着陸する鉄人28号と向かい合つ。無骨な鉄塊に見える鉄人だが、野生の勘とも言えるガロードの感覚は、秘められた実力を察知し、冷や汗を流す。

「？」

通信機が受信を示す。スイッチを入れるとスクリーンに少年の顔が映し出される。

『あ、写った。はじめまして、ボクは鉄人28号の操縦者で、金田正太郎と言います』

「はあ？」

正太郎と名乗る少年の横から別の顔が現れる。

『ボクは草間大作です。ジャイアントロボの操縦者です』

「……」

ガロードと同じ回線を開いていたヒイロだが、対戦相手の挨拶に何の反応もない。ただ、ゼロシステムを起動し、これからの対戦シミュレーションを行っている。

『皆さんに恨みはありませんが、地球のために全力で戦わせていただきます』

「地球のためって……オイ！」

真剣な顔の正太郎が放った言葉を、ガロードが聞きとがめる。現在、地球を襲っているのは彼らスーパー・ロボット軍団であるはずです。それが「地球のため」とはどういうことだろうか？

ガロードがその疑問を口にする前に鉄人が動く。ロケットブースターを全開にし、蒼い鉄塊がダブルエックスへ激突する。予想以上のスピードにガロードの反応が遅れた。

「くつ！」

すぐさま横にかわそうとするガロードだったが、鉄人の右腕がその胴を捕まる。そのまま、ダブルエックスはすさまじいパワーで抱えあげられ、空中を舞つた。

「ウソだろおおお！」

さすがにすぐに機体姿勢を立て直したが、ガロードの背筋に冷たいものが流れる。スーパー・ロボットを名乗るだけあって、そのパワーは圧倒的であった。

「くつ！」

ガロードの視線が上下左右に動く。鉄人が視界から消えているの

だ。

「ちいい」

鉄人がダブルエックスの右後方より接近してくるのが見える。反転しようとすると、鉄人の加速のほうが早い。ガロードは直撃を覚悟した。

「！」

鉄人とダブルエックスの間に光の柱がそびえたつた。ヒイロの乗るゼロカスタムがツインバスター・ライフルで鉄人を牽制したのである。その隙を突いて、ガロードはダブルエックスを退避させる。

「サンキュー！ ヒイロ！」

「油断するな。並の相手じゃないぞ」

ダブルエックスがシールドを持った手で、ゼロカスタムへ挨拶を返す。ヒイロは視線を戻し、正面に立つ巨体を見上げる。

「個別に戦っていては分が悪そうだ」

「ああ、コンビネーションマッチと行こうぜ」

ダブルエックスがゼロカスタムの横に立つ。そして、2機のガンダムが同時に加速をかける。

『まずはコイツからだ！』

目の前にいるジャイアントロボへ、2機が殺到する。その光景を遠く眺めながら、大作は腕時計に己の命令を告げた。

「碎け！ ジャイアントロボ！」

「ガオ！」

大作の声にジャイアントロボが反応する。巨大な拳がうなりをあげて放たれると、ヒイロは最小限の動きでこれを回避する。

「！」

わずかな隙だった。回避に意識を集中して、わずかに周囲への警戒を薄れさせたヒイロの後方から鉄人が襲い掛かる。

「鉄人！ そいつをつかまえろ！」

正太郎の言葉に忠実に従い、鉄人はゼロカスタムを羽交い絞めにする。そして、一気に急上昇をかけて、ヒイロを上空へと連れ去つ

た。

「ぐう！」

無人機だからこそ可能な殺人的加速に巻き込まれ、ヒイロの視界が赤く染まる。急激なGによって毛細血管が異常を来たすレッドアウト現象である。

鉄人の加速は殺人機とまで言われたトールギスの比ではない。戦闘工作員として鍛えられたヒイロをもってしても、恐るべき苦痛をともなうものだった。

赤い空が黒く染まる。夜空ではなく宇宙が前方に広がっていた。成層圏近くまで上昇した鉄人は、一気に方向を変え、今度は上海市街へ向かって加速する。

正太郎のとつた作戦はシンプルであった。超高々度から鉄人を急降下させ、地上すれすれでゼロカスタムを切り離す。加速によって意識が混濁したパイロットは、その動きに対応できず、マッハの速さで上海に突き刺さるという寸法である。

「…」

無表情なヒイロの顔に苦悶の色が浮かんだ。重力と鉄人の加速によつて、数十Gというすさまじい加重がヒイロの全身をさいなんでのいた。

「うおおおおお…」

濁つた意識の中で、ヒイロはありつたけの力を込めてスロットルを倒す。なんと、ゼロカスタムのバーニアを吹かして、さらに加速をかけたのである。

「バカな！ 自殺する気ですか！」

ゼロカスタムの加速を見た正太郎が叫ぶ。相打ち覚悟の加速など、無人機の鉄人には意味がない。正太郎の明晰な頭脳は、ゼロカスタムの加速を見切り、切り離しポイントを瞬時に計算する。

上海の摩天楼の中へ2機のロボットが急加速する。まるで無数の槍が突き出されるような錯覚の中で、ヒイロはスロットルを思い切り横へ倒した。

「な！」

正太郎が驚愕の声をあげた。いきなり横へ加速したゼロカスタムによつて、鉄人はバランスを崩し、上海のビルへと叩きつけられる。考えてみれば簡単な理屈である。高速で落下する物体は、横からわずかな力を込めただけでたやすく軌道を変える。しかし、あの状況下でそれを実行するのは並みの神経ではない。

「鉄人！」

たまらずに正太郎は鉄人とゼロカスタムを切り離した。弾け飛ぶように分かれた2機は、それぞれが高層ビルに叩きつけられ、その半ばでようやく停止する。

「すっ……
げえ……」

ジャイアントロボのスponson砲をかわしながら、ガロードはその攻防に驚嘆する。捨て身の戦略ともいうべき行動で、戦況を変えるヒイロの戦いぶりに自分が及ばぬものを感じたのだ。

「だが、オレだって！」

ガロードが空を見上げる。赤い夕日は沈みかけ、そしてうつすらと白い月が見え始めている。
夜が来たのだ。

第07話「ダブルエックス起動！」

「はじまつたようだな戴宗」

上海市内を見渡す小高い丘にある公園で、スーツの紳士が4機の戦いを眺めていた。

機械仕掛けの眼帯をつけ、葉巻をふかした紳士の隣には、この時代とは異なる奇妙な服を着た男がひょうたんから酒を傾けている。

「ああ、動きを見る限りでは大作も正太郎も本気だな。どっちが勝つと思う？　ええ、衝撃の？」

「ふつ、決まつてある」

男の問いに紳士が笑つた。友人とは思えない緊張感が漂つてはいたが、一人の顔にはどこか心を許した気安さがあつた。

「強いほうだ」

「なあらほど。そいつは分かりやすい」

紳士の言葉に男はニヤリと笑つ。そして、持つていたひょうたんを紳士へと放り投げた。

「サテライト・キヤノン！ 行ぐぜ！」

ダブルエックスの背部から長大なビーム砲が展開する。円面プロント「D・O・M・E」によるマイクロウェーブ供給を受けて放つ必殺兵器サテライト・キヤノンである。

「動けるかヒイロ！ マイクロウェーブ充填まで、けん制を頼むぜ！」

「任務了解。実行する」

ガロードの言葉とともにヒイロのゼロカスタムが再動する。急降下の衝撃によつて流麗な翼の片方が破壊されていたが、それでもゼロカスタムは俊敏な動きでジャイアントロボへ攻撃をしかけた。

「させない！」

ゼロカスタムの放つマシンキャノンを片手ではねのけながら、ジャイアントロボは背負っているロケットを担ぐ。巨大なロケット噴射機の中から砲身が出現する。

「！」

バランスの狂つたゼロカスタムを神業的な操縦技術で制御するヒロが軽く舌打ちをする。殺人的な急減速を行つたゼロカスタムは、ロボが放つたロケット bazooka を間一髪で回避した。

「捕まえました！」

ゼロカスタムの頭上に影がさした。ガレキを跳ね飛ばして復活した鉄人が、その自重を武器としてゼロカスタムの腹部に突き刺さる。

「くう！」

ゼロカスタムの未来予測コンピューター・ゼロシステムがヒイロに無数の未来予測を提示する。膨大なデータと激しい衝撃の中で、ヒイロは次なる戦闘行動に移つた。

「なに！」

深刻なダメージを受けたままゼロカスタムは鉄人の腕をつかむ。そして、バーニアの全出力で加速すると、ジャイアントロボに向かつて突撃した。

「何をするつもりですか！」

「……」

正太郎は沈黙したヒイロの意図を察知した。ヒイロは自分のガンダムもろとも鉄人とジャイアントロボをぶつけようとしているのだ。そして、そこはダブルエックスのサテライントキャノンの射線上である。

「！」

ゼロカスタムと鉄人がロボの頭部に激突する。強烈な衝撃を受けたロボは、その巨体を揺るがして倒れた。

「相討ち覚悟か！ ロボ！」

「ガオ！」

大作の叫びに口ボが応える。しかし、起き上がるうとする口ボは無残な姿であった。顔面の半ばは破壊され、コントロールにも支障が出来ていた。

「口ボ！ 口ボオオオオオ！」

大作の連呼にも口ボの動きは鈍い。起き上がるうとしてはバランスを崩し、そして口ボは大作の声に応えることもできなくなる。

一方、激突した鉄人とゼロカスタムもただでは済んでいない。鉄人の重厚な装甲も無残にゆがみ、その片腕は失われている。ゼロカスタムに至つては、深刻なダメージを受けた胴体が完全に破壊され、腰から下が千切れ飛んでいた。

かろうじて残っていた「クピット」の中で、ヒイロは生きている通信回線を開く。モニターには月からのマイクロウェーブを待ちながら、死闘を見守っていたガロードの顔が映った。

「撃て、ガロード・ラン」

「え？ なんだと？」

ヒイロの言葉にガロードは耳を疑つた。今、口ボと鉄人を撃てばゼロカスタムは確実に破壊される。しかし、ヒイロはそれを実行しろといつ。

「この戦い負けるわけにはいかない。その勝利のためなら、オレの命くらい安いものだ」

「でも……ヒイロ……」

ガロードは逡巡を見せる。すると、ヒイロはいつにない強い口調でこう言った。

「貴様がコイツらをひきつけると言つたのだ。オレは任務を遂行した。次は貴様の番だ」

「でも……でも……」

なおもガロードはためらつた。その眼にはうつすらときめくものが見える。

「任務を遂行しろガロード・ラン！ でなければ……オレがお前を殺す！」

「！」

ガロードの眼に決意の炎がともる。涙をぬぐつたガロードはスロットルレバーを握った。

「分かつたヒイロ！　ごめんは言わないぜ！」

ダブルエックスの胸に月面から一條の光が降り注ぐ。放熱フィンが展開し、黄金の光が満たされていく。

「マイクロウェーブ来た！　いくぜっええ！」

ツインサテライトキヤノンが光を満たしていく。ヒイロはコクピットの中で、その光景をぼんやりと見つめていた。

「これでなにもかも終わりだ……任務完了……」

そうつぶやいてヒイロは眼を閉じようとした。しかし、その視界の隅にありえないものを見出し、彼は眼を見開く。

「なんだと！」

ヒイロが見たのは一台の奇妙な三輪自動車であつた。自動車はガレキの中を跳ね回るように疾走する。そして、大きなガレキに車輪を取られて、スピンしながらビルの残骸に激突した。

「あれは……」

車の中から飛び出したのは大作である。大作は傷ついた身を起こすと、倒れているロボへと向かっていった。

第08話「オペレーション・ファンタムナイト」散りゆくは、美しき幻の夜～

「ロボ！」

破壊されたロボの顔を大作がのぞく。焼けた装甲の間から見えるそれは真っ暗な闇であつた。

しかし、大作はためらわずにそこに身を躍らせる。ロボの設計者で、彼の父である草間博士の幻影が腕を伸ばし、息子を迎える。 「行くよロボ！ まだ、終わっていない！」

「ガオ！」

ケーブルを両腕に絡めた大作は、文字通りロボと合体する。操縦者の意思を感じたのか、ロボは咆哮をあげて、巨体を起き上がらせた。

「立ち上がる？ だが、もう遅い！」

「遅くはない！」

ツインサテライトキヤノンが閃光を放つた。その瞬間、ロボは地面に落ちていたガレキを持ち上げ、ビームを防ぐ。

「そんなもので止められるかああ！」

ガロードが絶叫する中、ロボはガレキを支え続ける。所詮、コンクリートと鉄筋の塊に過ぎないガレキは、ビームの超高熱で徐々に蒸散していった。

「くつそおおおお！ 負けるなロボ！」

「ガオ！」

サテライトキヤノンの光がガレキを突き抜けて、ロボを襲う。骨組みだけになつたガレキがついに崩壊したのだ。

「これで終わりだああああ！」

「まだ終わつてない！」

叫び声とともにロボの脇から赤い光が放たれた。大作は驚いて、自分の背後を見る。

「こ、これは……

「大作くん！ まだ諦めるには早い！」

赤い光を放っていたのは鉄人であった。各所から白煙をあげ、鉄人は正体不明の赤い光を放っている。

「正太郎くん！ これは……この光はまさか！」

「そう……鉄人のバギュームをメルトダウンさせたんだ」

バギューム。かつて、正太郎がスパイ組織・P X団と争奪戦を繰り広げたエネルギー鉱石である。そして、それは彼の父・金田博士によつて鉄人の心臓部に藏されていた。

莫大なエネルギーを持つバギュームが鉄人の装甲を溶かしていく。サテライトキヤノンのエネルギーさえも圧倒するバギュームパワーは、それを使役する者をも破壊する諸刃の剣であった。

「頼む！ 鉄人！ もつてくれ！」

「口ボ！ 負けるなあああ！」

2体のスーパー口ボットの渾身の行動に、さしものサテライトキヤノンも分が悪い。ガロードはすぐさまダブルエックスの全エネルギーをキヤノンに回したが、劣勢は挽回しようがなかつた。

「ちっくしょおおおおお！」

コンソールを叩いてガロードは絶叫する。ヒイロが命をかけて作ったチャンスを生かせぬまま敗北することは、ガロードにとつてあまりにも悲惨な結末であった。

『ガロード……ガロード・ラン』

エネルギー干渉によって雑音交じりの通信機からヒイロの声が響いた。ガロードは驚いて回線を合わせる。

「ヒイロ！」

『ひとつだけ聞く。マイクロウェーブ受信におけるコクピットの防御はカンペキか？』

「え？」

ヒイロの意図が分からずガロードは啞然とする。だが、ヒイロはもう一度強い口調で叫ぶ。

『カンペキかと聞いている！』

「あ、ああ……『クピット』には電磁気シールドが施されているから、大丈夫だと思うけど」

ガロードの答えにヒイロはたつた一言だけつぶやいただけだった。

『了解した』

半壊のゼロカスタムが動く。すでに翼は折れ、両脚を失ったその機体は地面をはいざるように背中へ手を伸ばす。

そして、背中に装着されていたツインバスター・ライフルをつかむ。激闘によつて損傷を負つていたが、まだ一発程度のエネルギーは残つている。

ヒイロはゼロカスタムを操縦しながら、メンテナンスハッチを開き、基盤を入れ替える。ビームを発射するためのコンデンサを引き抜き、いくつかの回路を遮断する。

「失敗しても恨むなよガロード・ラン」

基盤を戻したヒイロは、ゼロカスタムにツインバスター・ライフルを構えさせる。その砲身の先にあるのはダブルエックスのマイクロウェーブ受信装置である。

ヒイロの粗いはダブルエックスのツインサテライトキヤノンにさらなるマイクロウェーブを供給することであった。そこで彼はツインバスター・ライフルに残つているすべてのエネルギーをマイクロウェーブへ変換して放つ作戦を選んだのである。

「！」

サテライトキヤノンを受け止めることに集中している一機の横を閃光が走つた。ツインバスター・ライフルから放たれたマイクロウェーブがダブルエックスへと突き刺さる。同時に、発射の衝撃に耐えかねたゼロカスタムが弾けるように吹き飛ぶ。

「今度こそ……任務……完了だ……」

「クピットから吐き出されたヒイロの体が宙を舞う。それを目視しながら、ガロードは微笑を浮かべた。

「ありがとうなヒイロ。オレも行くぜ！」

ダブルエックスが一度目の咆哮をあげる。さらに太さを増したサテライトキヤノンの光は、バギュームの赤い光とジャイアントロボの巨体を呑み込み、白く塗りつぶした。

そして、同時にダブルエックスにも崩壊が訪れる。大容量のエネルギーの連射によってその機体は限界を超え、装甲の隙間からエネルギーがあふれだす。

万全であるはずのクピットも例外ではなかつた。光に包まれながら、ガロードは夜空に青く輝く月を見上げた。

「さよならティファ……」

上海の中心に光の柱が吹き上がる。そして、それは月へと届かんばかりに高く高く天へと昇つていった。

第09話「衝撃！ 超電磁の牢獄」

「ヒイロオオオオオオ！」

「ガローデくん！ ガローデくん！」

闘技場に映し出された戦いの結果を見て、8人のパイロットたちは驚愕と哀切の叫びをあげた。

「ふむ……これは引き分けと言わざるをえないな」

椅子に座っていたサンドマンが冷静な口調で言う。それを聞いたカミーゴとドモンが殺意さえこもった視線を向けた。

「貴様……」

「死んだのはアナタたちの仲間も同様なんですよ！ それを！」

サンドマンに食つて掛かるつとする2人の間にアムロが割つて入る。

「やめる！ ヒヒあの男を攻撃してどうする！ 相手の心理作戦かもしれないんだぞ」

「でも！」

反感を込めた視線でカミーゴたちはサンドマンを見上げる。サンドマンはそれを意に介した様子もなく、席を立つと闘技場の一角を指差した。

「さて、第一試合へのゲートだ。誰が行くのかね」

サンドマンの言葉はあくまで冷静である。残された8人はお互いの顔を見合わせる。

「ボクが行きますよ」

「じゃあ、オレも」

名乗り出たのはカミーゴとジュードーだった。すると、自分が名乗り出ようと思つていたドモンがジュードーの肩をつかむ。

「ジュードー、オレが行く」

しかし、ドモンの言葉を聞いたジュードーはドモンが驚くほど強い力で、その手をふりほどいた。

「悪いドモンさん。オレに行かしてくれないかな。少し頭に来てるんだ」

「お前……」

その表情はいつもの明るくおどけたジユードーに見える。しかし、その奥に燃え上がっている何かを感じ取り、ドモンは諦めの顔になつた。

「わかった。ただし、絶対に負けるなよ」

「言うまでもないじゃん。オレは負けないぜ」

そう言い残して、ジユードーは愛機ΖΖガンダムへと乗り込んだ。先にΖΖガンダムに乗り込んだカミーゴはヘルメットを被り、いつでも出撃できる状態である。

「さて……行きますかカミーゴさん」

「ああ……カミーゴ・ビダン! ΖΖガンダム出ます!..」

「ジユードー・アーシタ! ΖΖ行つくぜええ!..」

ΖΖガンダムがウェイブライダーへ変形し、ゲートへと突入する。ΖΖもGフォートレスへ変形してその後を追つた。

「絶対に負けるな。そして、生きて戻れよ」

2機の消えたゲートを見つめ、ドモンはそつそつと拳を握り締めた。

「ここのは?」

ゲートを抜けたカミーゴが見たのは真っ白な雪原であった。しばらく、周囲を見回した彼は、そこがどこであるか気づく。

「……キリマンジャロか」

カミーゴの脳裏に苦い記憶が蘇る。かつて、ティターンズと戦っていた彼は、ここでフォウ・ムラサメという少女に再会した。人為的にニコータイプ能力を強化された彼女は、カミーゴの努力も虚しく、雪原に命を散らせたのである。

「カミー コさん！ 何か来る！」

ジユードーの声にカミーコは我を取り戻す。ミノフスキーパーティー粒子が薄いためにからうじて使えるレーダーには確かに接近する反応があった。

「10機？ 2機じゃないのか？」

戦いは2対2のタッグ戦であるはずだ。カミーコはレーダーを見直してみるが、確かに反応は十機である。

「どういうことだ？」

「罠だよ！ 最初からタッグ戦なんてウソだつたんだよ」
ジユードーが怒りの声をあげるが、カミーコにはその言葉が信じられない。サンドマンの自信ありげな態度は、そんな姑息な手段をとるようには見えなかつた。

「来る！」

吹雪の向こうから2機の戦闘機が飛来する。奇妙な形とカラーリングをした戦闘機はウェイブライダーをかすめるように飛び、そして離脱した。

「どういうつもりだ

「挨拶つてことさ！」

通信機から声が聞こえる。いかにも気の強そうな若者の声であつた。

「オレの名は葵豹馬！」

「オレは剛健一。オレたちがキミたちの対戦相手だ」

おそらく戦闘機のパイロットなのであらう。その声を聞いたジユードーは、彼らに食つて掛かつた。

「何が対戦相手だよ。10対2なんて反則じゃないのかよ！」

ジユードーの言葉を聞くと回線の向こうから鼻で笑う声が聞こえた。
確かに10人と2人じゃ釣りあわないかもしれないな

「でも、戦いは2対2だ。安心しろ」

言葉の意味が分からぬ。では、残り8機は観客だとでも言ひうのだろうか。カミーコは相手の意図が図りかねた。

「じゃあ、見せてやるか……レニンエン…コ・ン・バ・イ・ン！」

「おう！ レニンエン…ボルトイイイイイン！」

曇天に光輝くの字が二つ映し出される。そして、その光へマシンたちが吸い込まれていく。

「え？ エエエエ！」

眼前の光景にジユドーが驚きの声をあげる。なんと戦闘機を中心 にそれぞれ5体のメカが集結し、1体のスーパー口ボットへと合体 を遂げたのだ。

合体変形というなら自らの乗るZZも同様である。しかし、ZZ の合体変形とは迫力もスケールも違います。ジユドーは現れた50メートルを越える2体の巨人に圧倒される。

「コン・バトラーヴ！」

「ボオオオルテエエエス！ フアアアイブ！」

コン・バトラーヴとボルテス？。ともに超電磁力を操る合体ロボ がキリマンジャロに出現する。カミーコたちはその威容に驚きなが ら、この戦いが第一戦に匹敵する激戦になることを予感していた。

第10話「トリプルゼータ」

「へっ！ デカいからってエラいのかよ！」

自身の不安を消し去るようにジユドーが声をあげる。GフォートレスをZZに変形させ、雪原に立つた彼はダブルビームライフルを構えて、2体の巨人を見上げた。

「サイコガンダムだつて戦えたんだ！ いける！」

「待てジユドー！」

Ζガンダムを着地させながらカミーユが制止する。だが、その言葉を無視して、ジユドーは一条のビームを放つ。

「豹馬！ オレに任せてもらおつか！」

「分かつたぜ健一」

ボルテスがコン・バトラーの前に出る。ボルテスは両手を広げ、全身から閃光を放つた。

「ウルトラスピアアアク！」

ボルテスの全身を超電磁エネルギーが包む。ZZのビームはそのエネルギーに巻き込まれ、雲散霧消してしまった。

「な、なんだよ。バリアーか！」

「不用意に仕掛けるな。並の相手じゃない！」

カミーユの乗るΖはメガバズーカランチャーを構えると、キリマンジャロの山峰を盾にするように動いた。ジユドーも彼の意図を察し、ZZを遮蔽物の陰へ移動させる。

「おいおい、これからケンカをしようってんだぜ。かくれんぼしてどうすんだよ。ビッグブラスト・ディバイダー！」

豹馬が呆れた声をあげる。彼はコン・バトラーを操作するとその腹部から巨大なミサイルを発射する。ミサイルはカミーユの方へ飛翔すると途中で爆発し、無数の小型ミサイルをばらまいた。

「ちい！」

小型とは言え、全長55メートルの巨大ロボから放たれたもので

ある。それはモビルスーツの放つミサイルと大差がない。カミーユたちは雪を跳ね上げて、飛来するミサイル群を回避する。

「まるでスコールだぜ！」

かわしきれないミサイルをバルカンで迎撃しつつ、ジュドーが毒づく。しかし、次の瞬間、彼は頭上にボルテスがいることに気づき、背筋を凍らせた。

「グランドファイアー！」

2人の視界を真紅の炎が覆つた。ボルテスの放った灼熱の炎がキリマンジャロの山肌を焼き尽くす。炎の中心からからうじて脱出した2機は、雪原を滑りながら体勢を整える。

「化物かよ！ 待っていたんじゃジリ貧だぜカミーユさん…」

「くそっ！」

舌打ちをしながらカミーユはΖガンダムのメガバズーカランチャーを構える。メガバズーカランチャーの閃光がコン・バトラーとボルテスへと放たれた。

「その程度でオレたちを倒せるか！」

豹馬の言葉と同時にコン・バトラーが旋回を始める。超電磁の力をまとつたコン・バトラーは、巨大なコマとなつてビームと激突した。

「超電磁スピィィィィン！」

メガバズーカランチャーのビームを弾き飛ばし、超電磁スピングΖガンダムのほうへと向かっていく。カミーユは反射的に回避行動をとるが、すさまじいエネルギー渦がΖガンダムを引き込んでいく。

「カミーユさん！」

Ζガンダムの腕をΖΖがとる。そして、2機分の推進力を使い、Ζガンダムは超電磁スピングから逃れた。

「すまないジユドー！」

「正面からじゃムリだ。撃乱戦術で行こうぜー！」

2機のガンダムは一手に分かれ。雪原を蹴散らしながら、彼らはコン・バトラーとボルテスを包囲するような行動を取つた。

「パワーはお前たちでも、スピードはオレたちだぜ！」

スーパー口ボットたちの攻撃をかわしながら、ジユドーはゾゾのビームライフルを放ち続ける。圧倒的な巨体を持つコン・バトラー＆ボルテスだが、合体機構を持っている以上、さほど強度が高いはずはない。彼の狙いはドッキング部分だった。

「こざかしい真似を！」

ボルテスが光のムチを放つ。だが、それは数秒前にゾゾがいた場所を溶岩に変えただけだった。二ユータイプのみが可能な行動予測によつて、ジユドーとカミーユは巨大口ボットの猛攻をかわし続ける。

ヨーヨー、ミサイル、ロマと多彩な兵器が一機を襲う。間一髪でそれをかわしながら、カミーユは2体の弱点を探す。

「？」

カミーユの意識に妙な感覚が入り込む。気がつけば、脚からわずかな震動が伝わっていた。カミーユは驚いてキリマンジャロの山頂を見上げる。

「雪崩か！」

戦いによつて起きた振動がキリマンジャロに降る雪を動かしたのだ。山頂からまるでヴェールのような白い波がこちらへ向かってくる。

「ジユドー！」

「確認したよ。どうするカミーユさん！」

見るとコン・バトラーたちは非難のために上昇を開始していた。こちらも変形して上空へ逃げたいところだが、敵が待ち構えている場所へ向かうのは自殺行為である。遮蔽物のない空中戦では狙い撃ちになるかもしれない。

カミーユが迷っている間も雪崩は彼らに迫つてくる。やりすごそうにも逃げ込むほど大きな場所はない。白い壁を前にカミーユは冷たい汗を流す。

「！」

雪崩が2機を巻き込む。上空で見下ろす豹馬たちは、一瞬で消えていく2機を見て、息を呑んだ。

「お、おいおい……」

白で塗りつぶされた山腹を見て、豹馬は拍子抜けした表情を浮かべる。健一も2機の姿を探すが反応は完全に消えていた。

「雪崩に飲み込まれておしまいか？」

「まさか……」

わずかだが2人の気が緩む。その感情の変化を察知したように、2本の雪柱が巻き上がった。

「！」

「そんな簡単な連中じゃないか！」

コン・バトラーとボルテスの反応が遅れた。雪原を吹き飛ばして飛び出した2つとは、十字砲火の位置で2体を捕らえる。

「これで！」

「終わりだあああ！」

Zガンダムのメガバズーカランチャーと、ZZのハイメガキヤノンが光の雄たけびをあげた。必殺の武器を不意打ちに近い形でくらえ、さすがのスーパー・ロボットもただではすまない。カミーユとジユドーは勝利を確信した。

「甘いぜ！」

「オレたちはそんなにヤワじゃねえ！」

豹馬が健一が叫ぶ。コン・バトラーとボルテスは両手を握り合い、そして、その巨体を旋回させはじめた。

「超電磁！」

「ダブルスピニン！」

スピニンなどというレベルではない。超電磁力を最大出力で発散し、巨大な電磁モーターとなつた2体は、数百メートルの電磁嵐を作り上げる。

必殺のタイミングで放つた攻撃も、ビームである以上、この超電磁の前には拡散するしかない。さしもの2大ニュータイプも、この

デタラメな防御術に唖然とする。

「か、勝てるわけねえじゃないか……」

ジユードーは自分が震えていることに気づいた。ダブリンでもアクシズでもこれほどの絶望は経験したことがない。彼は生まれて初めての無力感に苛まれていた。

「諦めるな！ ジユードー！」

「！」

Ζガンダムからカミーユの叱咤が飛ぶ。我に帰つたジユードーは、Ζガンダムが奇妙なオーラに包まれていることに気づく。

Ζガンダムのコクピット内では、カミーユがその精神を解放させていた。

目の前の敵に勝てる装備はΖガンダムはない。では、どうすればいいか？ その答えを見つけたのは彼ではなかつた。

（焦りすぎよ。だからいけないの）

やさしい声が聞こえた。それはかつて彼が憧れていた女性の声だった。

（パワーが段違いなんだよ。そんな時はどうするんだい？）

凛々しさと余裕を窺わせる女の声がする。カミーユはそれを聞いた瞬間、覚悟を決めた。

「オレの体をみんなに貸すぞ！」

（そう、それでいい……）

Ζガンダムのバイオセンサーがオーバーロードを開始する。それは、まるでカミーユの魂を食いつくすようだつた。

第11話「命散つて」

「な、何が起こっている！」

眼前のΖガンダムに変化が起きたことに豹馬は愕然とした。

「気をつける！ 今までと違う！」

健一も相手の変化に気づいていた。この雰囲気は以前にも何度も経験がある。

「ガルーダの時と……」

「ハイネルの時と……」

かつての好敵手を思い起こすほど年の氣迫を感じ、一体のスーパー・ボットは慄然とする。機体性能ではない。相手は魂でこちらにぶつかつてこようとしているのだ。

「健一！ こいつは……」

「ああ、本気で行くぞ！ 豹馬！」

コン・バトラーとボルテスが見構える。同時に2体もすさまじい気合を吹き上げる。

「天空剣！」

ボルテスの最強武器が姿を現す。そして、コン・バトラーもまた最強の形態へと姿を変えていく。

「グラン・ダッシュヤー！」

自らを除く全員の闘志にジユドーは完全に取り残されていた。だが、カミーゴが命を賭けようとしているのは、すでに分かっている。「じゃあ、オレも行きますか！」

そう叫び、ジユドーはΖΖを起動させる。一瞬、妹の顔が浮かぶが、それを振り払い、ジユドーは機体を前進させた。

「ジユドー！ オレが突破口を開く！ そこにハイメガキャノンを叩き込め！」

「イヤだね！」

「！」

カミーゴが驚いてNNを見る。すると、NNの全身にもオーラの
ようなものがまとわりつあった。

「ガロードやヒイロ、そしてカミーゴさんだけにいい格好をさせて
たまるかよ！」「

「ジユドー！」

「勘違いしないでよ。オレは勝つために行くんだぜ」「
ジユドーの言葉にカミーゴはフツと表情を緩めた。

「ああ、そうだな……勝つために行くんだ」

「そうや」

カミーゴとジユドーは同時に息を吸った。眼前には圧倒的な力を
持つ2体のスーパー・ロボットが迫っている。

『うおおおおお！』

ウエーブライダーとGフォートレスへ変形した2機のガンダムが
飛翔する。それはオーラをまとい、一條の稻妻となつた。

だが、それを迎え撃つ2体も並のスーパー・ロボットではない。全
身全靈を込めた一撃で、2機の特攻を受け止めようとしていた。

「…」

豹馬の耳が奇妙なものを捉える。それは人の声のようだった。

「なんだと？」

周囲にみなぎる超電磁の一部が何かの形をとつては散っていく。
それは人間の姿にも見えた。

「なんだ！ これは！」

「分かるまい！ このオレを通して出る力が！」「
体を通して出る力だと？」

豹馬が聞き返す。すると、また女の声が聞こえた。

(カミーゴはそれを表現してくれるマシンに乗つている)
(Ζガンダムにね)

幻聴ではなかつた。その声は確かに豹馬の耳に聞こえる。

「そつか……そういうことかよ」

声を聞いた豹馬はグランダッシャーを加速させる。目標はウエー

ブライダー。目的は正面からの激突である。

「機体の優劣は関係ねえ！ オレたちとお前！ 人間と人間のケンカつてわけだ！」

「ここから消えてなくなれええええ！」

両者は激突した。その衝撃はすさまじく、Ｚもコン・バトラーも閃光の中へ消えていった。

一方、Gフォートレスもまた、ボルテスへと突進を開始していた。飛翔するGフォートレスをとらえるべく、ボルテスは超電磁ポールを発射する。

「残念だがオレたちの勝ちだ！ 天空剣！ Ｖの字斬りいいい！」

「そうはいくかよ！」

オーラをまとったGフォートレスが分離する。三つのパーティに分かれた機体は、天空剣の切っ先を逃れ、再び合体し、 ZZへと変形した。

「これが最後だあああ！」

「おおおおおお！」

健一が渾身の力で天空剣を振り上げる。ボルテスにハイメガキヤノンが放たれたのと同時に、剣先がZZを両断する。

「遅かつたな！」

満足げな笑みのジユドーが親指を立てる。そして、両者もまた爆発の中に消えていった。

第1-2話「出撃！ シン&サン&アム！」

「ふむ……予想外だ」

椅子に座っているサンドマンは、戦いの成り行きを眺めて息をついた。

「まさか、超電磁の巨人たちが敗れるとは思わなかつたな。彼らの油断を責めるべきか……いや、キミらの健闘を称えるべきだろ？」「あくまでも冷静な態度を崩さない。アムロたちはそんな彼を見上げながら、じつと怒りをこらえ続けていた。

「では、中堅戦といこうか。今度の相手は手ごわいよ」

「面白い……」

拳を鳴らしながらドモンが前に出る。アムロが手を触れようとするが、それをドモンは視線だけで制止する。

「アムロ。止めるつもりじゃないだろ？」「しかし……」

アムロはこれ以上の犠牲者を出すことを恐れた。これまでに出撃したパイロットは誰も帰つてこない。ならば、ドモンも同じように帰つてこないのではないか？ そんな考えが浮かんだのだ。

「アムロさんはオレたちのリーダーです。だから、オレたちの帰りを待つていてください」

そう言つたのはシンだつた。シンはドモンの隣に立ち、決意の表情を見せる。それを見たドモンは優しげな微笑を浮かべた。

「よし、オレのパートナーはお前だ。シン」

「はい！」

勢いよく返事をしたシンがテスティニアーガンダムへ駆けていく。

ドモンはアムロたちから離れると、右手を空に掲げた。

「出るおおお！ ガンダアアアアム！」

ドモンの指が音高く響くと、上空からゴッドガンダムが飛来する。すばやくそのコクピットに飛び乗つたドモンはアムロにも笑いかけ

た。

「戦いは一引き分けだ。これからは一戦も落とせない。任せてもらおう」

「ドモン……」

アムロには何も言葉が浮かばなかつた。ドモンはファイティングスーツをまとい、戦闘準備を整える。

一機がそろつたことを確認したサンドマンが、新たなゲートを開く。ドモンたちはその方向へと歩き出した。

「キング・オブ・ハート、ドモン・カッシュか……。これはうれしい偶然だな」

「なんだと？」

サンドマンの言葉にドモンが反応する。

「次の試合会場はギアナ高地だよ」

「！」

ギアナ高地。かつて、ドモンが師匠マスター・アジアと修行を行つた地であり、デビルガンダムとの激闘を繰り広げた因縁の地である。ドモンは宿縁の深さを感じ、しばし瞑目する。

「ドモンさん……」

「行くぞシン！』

ゴッドガンダムがゲートをくぐる。それに続いてデステイニーも消えていった。残された四人のパイロットは彼らの無事を祈り、その背中を見つめていた。

アマゾン・ギアナ高地。その隆起したテーブルマウンテンと複雑な地形によつて、人間の侵入を拒み続ける秘境である。

その中でも一際大きなテーブルマウンテンに一機のガンダムが降り立つ。ドモンは以前と変わりない光景を眺め、不意に口元を緩める。

「どうしたんですか？」

「いや……つぐづぐ、オレはここに嫌われているらしいと思つてな」
ドモンはそれだけつぶやくと、周囲を見回す。相手の姿はまだ見えない。ふと思いつたドモンは、口クピットハウツチを開けてギアナの大地へ立つた。

「ド、ドモンさん！」

慌てたシンの言葉に片手で応えると、ドモンは大地へ片ヒザをつき、土へ手を触れた。

「風も土も匂いも変わらないな。あの時と……」

「戦いの前にしては、感傷的じやないかガンダムファイター」

「！」

殺氣に反応し、ドモンがその場を飛びのく。先ほどまでドモンがいた場所に一本のナイフが突き刺さった。

「おいでなすつたな！」

林の向こうから一人の男が現れる。長髪をなびかせた若い男だ。片手に数本のナイフを持った男は、片手に数本のナイフを持った男は、さわやかな笑みを浮かべている。

「オレのナイフをかわすとはやるじやないか」

「ふん、脅しのナイフに当たるようなバカは、ガンダムファイターになれないぜ」

ドモンは身構える。男は笑みを不敵なものに変えて、同じく戦闘態勢をとつた。

「運が悪かつたな。生身でガンダムファイターに出会うとは。スープーロボットに乗る前に決着だ」

「さて、それはどうかな！」

男が大地を蹴る。そのスピードは常人のそれを凌駕していた。一瞬で距離を詰めた男のパンチを紙一重でかわしたドモンは、反撃の拳を繰り出す。

「甘い！」

最小限のステップで男は身を翻した。完璧なタイミングだった拳

をかわされ、動搖するドモンの腹に男の膝蹴りが突き刺さる。

「グフウ！」

並みの打撃ではない。ドモンは腹の痛みに耐えながら、男と距離をとる。一見して優男に見えるが、ガンダムファイターに匹敵する実力を持つているらしい。

「貴様、ただの人間じゃないな」

ドモンがそう言つと、男は自信に満ちた顔でうなずく。そして、彼は拳に輝く紋章をドモンへ見せ付ける。

「？」

「見せてやるぜ！ エヴォリュダーの力を！」

声とともに男は空高く跳躍する。すると上空から飛んできた真っ白いライオンのロボットがその体を呑み込んだ。

「なんだと！」

ドモンよりも早くシンが驚きの声をあげる。一人の驚きをよそに、ロボットは人型へと姿を変えていく。ドモンは「ゴッドガンダムへ戻り、戦いの準備を整えた。

「まだまだ！ 命！ 賴むぜ！」

『了解！ ファイナル・フェージョン！ リリース！』

空間に変化が生まれる。空から翼竜のようなメカが飛び、空中からイルカとサメのようなメカが出現する。地中からモグラのようなメカが顔を出し、それぞれがロボットへと集結していく。

「いくぜえええジェネシック・マシンたち！」

竜巻のようなエネルギー渦の中で、ジェネシック・マシンがロボットと合体していく。そして、嵐が収まった時、そこには禍々しい形相の巨大ロボが出現していた。

「こ、コイツが相手か！」

「そうだ。このジェネシック・ガオガイガーが貴様らを倒す！」

ジェネシック・ガオガイガーから男の声が聞こえた。男の名は獅子王凱。この地上最強の勇者王ジェネシック・ガオガイガーと融合した超進化人類エヴォリューターである。

圧倒的な威圧感を放つジェネシック・ガオガイガーを前にしても、ドモンはたじろがない。ゴッドガンダムを起動させた彼は、シンの乗るデスティニーと共にジェネシック・ガオガイガーを挟む。

「2対1でやるつもりか？ オレたちをなめ過ぎだぜスーパーロボット」

「待てい！」

ジェネシック・ガオガイガーへ攻撃しようとするドモンたちの耳へ男の声が響く。見ると、テーブルマウンテンにある一際尖った岩山に人影が立っている。

「強大な勇者王に対し、戦いを決意する男たち。だが、勇者王とともに命をかけて戦う武人もいる。人それを、相棒という……」

「何者だ！」

岩山に立つ男は全身が機械化された青年だった。腕組みをしたまま言葉を放つ青年は、自信に満ちた顔でこう叫んだ。

「クロノス族族長！ キライ・ストールの息子！ ロム・ストール！」

ロム・ストールは叫びともに跳躍する。そして、彼の手にする武器・剣狼が巨大なロボットを呼び出す。

「パアアアイル！ フォーメイション！」

一瞬の閃光と共に赤い巨人が降り立つた。ロムが剣狼の導きによつて合体する巨大ロボット・バイカンフーである。

「これで」

「ようやく」

「役者が」

「そろつたな！」

対峙した4人が同時に動く。ギアナ高地を舞台に男たちの戦いが火蓋を切つたのである。

第13話「我が心、明鏡止水」

「ゴッドガンダムの拳がガオガイガーのプロテクトショードに受け止められる。バイカンフーの剣狼を『ディスティニー』のアロンダイトが弾いた。

格闘戦に優れた4機は、まったく互角の戦いを開幕する。かすっただけで碎け散りそうな一撃を、すさまじい集中力でかわしながら、両コンビは攻防を続けた。

「！」

戦いの中にわずかな空隙が生まれた。張り詰めた精神に耐え切れず、シンは機体をバイカンフーから引き離そうとする。しかし、戦いの駆け引きを熟知するロムは、それを許さない。

「くっそ！」

「甘いぞ！ 戦いの呼吸を読むんだ！」

まるで、武術の指導をしているようなロムの口調だった。アスランから受けた厳しい指導を思い出し、シンは唇をかむ。

「シン！」

ドモンの声が響く。気が付くとバイカンフーの巨体が眼前に広がっていた。あの巨体がなぜこうも早く動けるのか。迫り来る剣狼の切つ先を見つめながら、シンはその迫力に圧倒された。

「！」

シンの窮地にドモンが動いた。ゴッドガンダムがダッシュをかけ、バイカンフーの横合いから攻撃をしかける。ロムはすぐさまそれをかわし、追いすがつたガオガイガーとともにゴッドガンダムへ攻撃を返した。

しかし、ガオガイガーとバイカンフーの攻撃は、空を斬る。直撃かと思っていた彼らの攻撃は、ゴッドガンダムの残像を切り裂いただけだったのだ。

「分身殺法！ ゴッドシャドー！」

「さすがはキング・オブ・ハート！」

「楽しませてくれるぜ！」

ドモンの巧みな戦いぶりに、ガイとロムから賞賛の声がもれる。その光景を見て、シンは自分の未熟さを痛感していた。

（クソ！ ドモンさんががんばっているのに、オレは足手まといじゃないか！）

苛立しさを振り払つよつて、シンはデステイニーを加速させた。一気にガオガイガーの眼前に迫ると、突き出された拳をかわしながら背後に回る。加速によるGに耐えながら、シンはガオガイガーへ長距離ビーム砲を構えた。

「もううつー。」

「甘いぜ！」

ガイは攻撃をかわすのではなく、距離を詰めて相殺する手段に出た。ガオガイガーの背中がデステイニーに激突する。重量差があるだけに、その衝撃は並み大抵ではない。攻撃のタイミングを狂わされ、シンはあわてて距離をとつた。

「くつそーー！」

「焦るんじゃない！ 焦れば何もできなくなるぞ！」

ガイの声がシンを叱咤する。完全に格の違いを見せ付けられ、シンは唇を強くかむ。

「くそ！ くそ！ くそー！ くつそおおおー！」

激情に駆られたシンの中で、何かが弾ける。シンの顔から表情が消え、機械のような正確な動きで、シンはデステイニーを操縦する。デステイニーが矢継ぎ早な攻撃を繰り出す。ガイはガオガイガーのプロテクトシェードで防ぎながら、彼の動きを観察する。

「動きが格段に早くなつたな！ しかし、貴様に足りない物がある！」

「その通り！」

ゴッドガンダムと戦っていたバイカンフーが跳躍する。そして、ロムとガイは同時にデステイニーへの攻撃を開始した。

「しまつた！ 逃げるシン！」

ドモンの叫びをシンは無視した。静謐とした言える空気をまとつたデスティニーは、アロンダイトをふりあげ、長距離ビーム砲を構えて、2体のスーパーロボットの急所を正確に狙う。しかし、その動きは正確ゆえに、歴戦の漢たちには予想しやすい動きだったのだ。

「貴様に足りぬ物は！ 情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ！」

「そして、何より勇気が足りない！」

アロンダイトが剣狼によつて碎かれ、ブロウクンマグナムが長距離ビーム砲を粉碎する。バランスを崩したデスティニーは岩盤へと叩きつけられる。

「血の通わぬ拳で俺たちは倒せない！」

岩山の山頂でガオガイガーとバイカンフーが叫ぶ。ドモンは落したデスティニーへゴッドガンダムを飛翔させた。

「大丈夫かシン！」

「…………う。な、何とか…………でも…………」

完全に敵のほうがあることを知り、シンはその全身に震えが走つていた。その変化にドモンが敏感に反応する。

「どうしたシン？」

「だ、ダメです……オレじゃ、ドモンさんの足手まといになります……」

カタカタと歯のぶつかる音が聞こえる。無鉄砲とも言える思い切りの良さを持つシンが、今、圧倒的な敵の存在に恐怖を覚えているのだ。

「ダメだ……勝てるわけがない……オレなんかが……オレなんかが選抜されちゃいけなかつたんだ」

シンが弱音を吐く。それを聞いたドモンは、眉をしかめて、腕を振り上げた。

「！ ガアアアア！」

「ゴッドガンダムの拳が『テスティニー』の頭部を強打する。パートナ一からの攻撃に、シンは一瞬何が何やら分からずに、呆然とした顔をする。

「甘ったれんじゃない！ それでもガンダムパイロットか…」

「で、でも……ドモンさん」

なおも弱音を吐こうとするシンへ、ドモンは怒りの言葉を口にする。

「ヒイロー！ ガロード！ カミーユ！ ジュード！ この戦いでかけがえのない漢たちが散つていった。お前はそいつらの想いを無駄にするつもりか！」

「し、しかし……オレの実力じゃ……」

「口応えをするなあああ！」

「ゴッドガンダムの第二撃が見舞われる。

「後悔がしたいなら！ 全力をふりしぼってから後悔しろ！ 貴様はまだ全力をふりしぼってはいない！」

「オ、オレの全力？」

ドモンの言葉にシンの眼に生気が戻っていく。光を失っていた眼光に光が灯る。

「血の通わぬ拳で、冷たいコーディネイターの眼で、何をやろうとアイツらに効くものか！ 真の戦士を倒せるのは、真の戦士の熱い拳だけだ！」

「熱い……拳……」

デスティニーがゆっくりと立ち上がる。それを見てドモンがゆっくりとうなづく。

「貴様にもあるはずだ。己の魂を込めて打ち出せる。最強の拳が！」

「拳……」

シンがデスティニーの右拳を見つめる。デスティニーの腕に装備された格闘武器パルマ・ファイオキーナのことが彼の脳裏に浮かぶ。

「貴様の拳を、魂の拳に変えるためには、明鏡止水だ！ シン！」

「はい！」

完全によみがえったシンは、テスティニーの右手を構えさせる。ドモンもまた、その身に気を充実させ、ゴッドガンダムの背部フィンを開展させる。

「行くぞシン！ 今日は貴様の『テスティニー』とオレの『ゴッド』でダブルファインガーだ！」

「了解！」

復活した対戦相手を見て、ガイとロムはお互いの顔を見合わせる。「ようやく本番というところだな」

「ああ、じゃあ、オレたちも行くとするか……」

ガオガイガーが両手を広げる。漆黒の破壊神の巨体を緑の光が包んだ。

「ギムギルガンゴーグフォ！」

バイカンフーは持っていた剣狼を右手につかみ、左手にもう一振りの剣を握る。彼の兄ガルディから受け継いだ流星である。一剣の柄頭を合体させ、ロムはダブルブレードを作り上げた。

「行くぞ！ 運命両断剣！」

彼らの能力が一気に増大し、4本の気の柱が吹き上がる。すさまじい力に、ギアナ高地全体が揺れる。それはまるで地球が脅えるようであった。

第14話「究極を越えた死闘！ ドモンタロに散る」

「ヘル！ アンド！ ヘブン！」

ガイの叫びとともに4人が同時に動く。デスティニーとゴッドガンドムが、右手を振り上げ、ガオガイガーが拳を突き出し、バイキンフーが剣を旋回させる。

「いいかシン！ ここからは氣力勝負だ！ 法んだほうが死ぬ！」
「分かつてます。もうオレは迷いませんよ！」

稻妻のごとくシンはデスティニーを加速させる。バルマ・フィオキーナの輝きがさらに増し、シンの両眼に熱い炎が燃え立つ。

そのシンの変化を見たドモンもまた機体を加速させる。背中のエネルギー発生装置が展開し、日輪のような光が浮かび上がる。

「我らの拳が真っ赤に燃える！」

「貴様を倒せと唸りをあげる！」

ドモンの言葉にシンが同調する。閃光を放ちながら、2機の拳が振り上げられる。

「くらえ！ ばああああくねつ！」

突き出されたガオガイガーの拳とバイカンフーの剣に2機の手のひらが激突する。エネルギーが爆風のように弾けるが、その中心で4人は動きを止めない。

「ゴッドフィンガー！」

「デスティニー・フィンガー！」

流派東方不敗を代表する必殺技を、シンは見よう見まねで再現してみせる。しかし、それは猿真似というレベルではなく、まさしく流派東方不敗の精神を受け継いだ一撃であった。

「グオオオオオオ！」

「ヌウウウウウ！」

さすがの2大スーパー口ボットもシンとドモンを受け止め、うめき声をあげる。わずかずつ後退していく2体を見て、シンは勝利を

確信した。

「これでえええええ！」

2機の出力がさらに上昇した。あまりの圧力に岩盤にめり込みながら、ガオガイガーとバイカンフーは攻撃に耐え続ける。

「や、やるな……さすがはキング・オブ・ハートとフェイスだ」「だが……貴様に教えてやろう」

ガイガイガーとバイカンフーの各所にsparkが起きる。どう見ても敗北間近の彼らだが、その顔に敗者のかげりはなかつた。

「最後に勝つのは……」

「勇氣あるものだあああああ！」

『…』

ガオガイガーの中にあるGストーンが閃光をあふれさせる。そして、その光はバイカンフーにも伝播し、2体を黄金色に染め上げる。「…」
「これは……」

「まるで……ハイパー・モードだな！」

黄金の巨人と化した2体がゴッドとテスティーネを押し戻す。さきほどまでの力とはケタの違うパワーに、さしものドモンとシンも後退を余儀なくされる。

「うわああ！」

2体の跳ね返したエネルギーがテスティーネを襲う。反射的に防御の姿勢をとるうとするシンだが、全力を出した彼の反応がわずかに遅れる。

(やられる!)

「弱音を吐くな！ シン・アスカ！」

一瞬、絶望にその身をゆだねかけたシンの耳に、ドモンの叫びが突き刺さる。ゴッドがテスティーネの前に立ち、その体でエネルギー一渦を受け止めていたのだ。

「ド、ドモンさん！」

ゴッドの全身をエネルギー渦が襲う。さしものゴッドもこの攻撃に耐え切れないかに見えたが、ドモンはすべての力を振り絞り、そ

の場を動かすに一撃を受け止めた。

しかし、そのダメージはすさまじく、ドモンはビザをついてしまう。すぐに駆け寄りつつするシンだが、ドモンは右手でパートナーを制する。

「だ、大丈夫ですか。ドモンさん！」

「……ああ。問題ない」

ドモンは大きく息をつくと、再びゴッドを立ち上がらせた。そして、シンとともに眼前のガオガイガーとバイカンバーを見上げる。

「ハア……ハア……」

シンは大きく荒く息をつきながら眼前の2体を見上げる。その重圧と威容は、シンの心をたやすく押しつぶしてしまいそうなほどにするさまじい。

だが、シンの心は折れなかつた。さきほどのドモンの行動が、この若者の心に覚悟という楔を打ち込んでいるのだ。

「さて……もう一度行こうか」

「ええ……次はぶつ倒します」

「ゴッドもテスティニーも異常なほど」の酷使によって、もはや満身創痍である。エネルギーもほとんど残っていない。よくて必殺技が2発打てればいいほうだった。

「フィンガーでは勝てないみたいですよ。どうします?」

「だったら、アレしかない……」

そう言つとドモンが両手を組む。そして、精神を集中するために

両手を開じた。

「おい、シン!」

「あ、はい」

ドモンと同じく精神を集中させていくシンに、ドモンが声をかけてくる。シンは心を落ち着けながら、返事をする。

「貴様と組めてよかつた。この戦い、負けよつともオレに悔いはない」

「よしてくれこよ。勝ちましょ。絶対に

シンの言葉にドモンは答えない。精神統一を終えたドモンは、その両眼を見開く。

『！』

ガオガイガーとバイカンフーに緊張が走る。ゴッドとテスティニーの全身が、彼らと同じように金色に染まりつつあるのである。

「こいつがハイパーモードか」

「よし！ 受けてたつぞガンダムジモー！」

ロムとガイが再び構えを取り。すると、ドモンとシンはお互いのほうを向き、両手を組み合わせた。

「いぐぞ！ 流派東方不敗があああああ！」

「最終！ 奥義！」

ゴッドの指がテスティニーの指と組み合わされ、2機はまるでダンスペアのような形になる。

「2人の拳が真っ赤に燃える！」

「明日をつかめと轟き叫ぶ！」

黄金の2機からすさまじいエネルギーが吹き上がる。機体から出る力だけではない。まさに魂を燃やした一撃を彼らは放とうとしていた。

「石！」

「破！」

ゴッドとテスティニーの顔部分がドモンとシンのものに変わる。いや、高まつた2人の魂がそんな幻想を生み出しているのだ。

「友情天驚けええええん！」

まさに全身全霊を込めたエネルギー球が2体のスーパー・ロボットを襲う。同時に必殺技を繰り出していた2体だが、ドモンたちの放った魂の一撃の前に一瞬でかき消されてしまう。

「うおおおおおお！」

エネルギー球の中から憤怒の形相の男が現れる。それは両腕を組んだまま2体へと突撃する。

「勝つた！」

シンが叫ぶ。天驚拳によつて弾き飛ばされた2体の「クピット部

分から口ムとガイが跳ね飛ばされる。

大ダメージを受け、2人は空中で徐々に分解されていく。だが、
その顔には敗北の無念さはなく、清清しいまでの賞賛があつた。

「やつたなドモン！ シン！」

「見事だつたぞ！」

その言葉を残し、2人は光の中へ消えた。徐々に収束していく光
を眺めていたシンは、いつの間にか流れていた涙をぬぐい、パート
ナーのほうへ顔を向ける。

「やりました……ドモ……ンさん？」

「……」

ドモンからの返事は無い。不審に思ったシンは、映像回線をゴッ
ドとつなぐ。

「…」

モニターに見えた映像にシンは絶句する。「クピットの「クピット」で
は、ドモンが口から血の糸を流しながら、立ち戻りしていた。

「ド、ドモンさん……」

見ればドモンのファイティングスーツの胸部に血の染みが広がっ
ている。さつき、シンの盾になつてガオガイガーとバイカンフーの
攻撃を受け止めたときに出来た傷である。

「シン……」

「ドモンさん！」

立ち戻くすドモンからかすれた声が聞こえる。思わずシンは「ク
ピット」を飛び出し、「クピット」へ飛び移つた。
「クピット内にシンが入るのとドモンが崩れ落ちるのは同時だつ
た。駆け寄つたシンがドモンの体を抱きとめる。

「ヤツらは……どうなつた」

「倒しました……オレたちの勝ちです！」

シンの顔に涙が流れた。その顔を見上げながらドモンは力なく笑
つた。

「やうが……」

ドモンの顔を赤い光が照らし出す。振り向いたシンは、ギアナ高地に日没が迫っていることに気づいた。

夕日に濡らされながらシンはドモンの体を横たえる。ドモンは、穏やかな顔で夕日を見つめている。

「美しいなシン……」

「はい！ とてもうつくしう「つい」やれこめす！」

ドモンの拳にかすかな力がこもる。そして、ドモンは右手を突き出した。

「流派東方不敗は！」

ドモンが声を振り絞る。それに応え、シンもまた涙ながらに声を振り絞った。

「王者の風よ！」

「全新！ 系列！」

「天破！ 侠乱！」

『見よ！ 東方は紅く燃えている！』

2人の叫びがギアナ高地に響く。そして、ドモンはフツと表情を緩めるとその拳を落とし、手を開じた。

「ドモンさん！」

それを見たシンは手を見開き、ドモンの名を呼ぶ。しかし、ドモンは安らかな顔のまま、シンの言葉に応えることはなかつた。

第15話「戦いは用へ」

闘技場で戦いを眺めていたサンドマンがかすかに眉宇をしかめる。「ふむ、これは完全に誤算だな。あれほどの勇者たちが敗れるとは、ロ元を引き結び、サンドマンが残念そうな顔を見せる。しかし、すぐに彼は余裕を取り戻し、スクリーンを見つめるガンダムパイロットたちへ声をかける。

「おめでとう。貴重な1勝はキミたちのものだ」

勝利を告げられてもアムロたちガンダムパイロットの表情に喜びはない。5人目の犠牲者を出したことが彼らの心を暗くし、とても優越感など抱けないでいた。

「残りは2戦。次に勝てばキミたちの勝利は確定するよ。こちらとしては負けるわけにはいかない戦いというわけだ」

サンドマンの言葉に残された4人の顔が一斉に彼を見上げる。その顔には怒りはなく悲壮感さえ漂う覚悟があった。

「次はボクがいきます」

そう言つたのはロラン・セックだつた。ガンダム最強と言われるターンエーガンダムのパイロットである彼は、並々ならぬ決意を秘めた顔で一步踏み出した。

「では、パートナーはオレがなるつ」

「いや、ボクが」

刹那とキラが同時に名乗りでる。どちらも譲るつもりはない。これ以上、犠牲者が出るのを見るくらいなら自分が戦うことを選んだのだ。

「待ってくれ。2人とも」

アムロが2人の両肩を叩く。今回の戦いでリーダーを務めているアムロは、2人の顔を交互に見つめる。

「アムロさんが決めてください」

「オレたちのどっちが出撃するかを」

アムロの言葉なら異存はない。2人は決意と期待を込めた目で彼を見つめる。

しかし、アムロの口から出たのは彼らが予想しない言葉だつた。

「すまないが、次はボクが出る

「アムロさん！」

「アムロ・レイ！」

キラと刹那の抗議の声を無視して、アムロがヘルメットを取る。

そして、愛機ニュー・ガンダムへと歩みだす。

「もう、限界なんだ。ボクの目の前で若い命が散つていいくのは、次の戦いで終わるというなら、ボクが出る」

「しかし……」

「すまない。刹那、キラ」

アムロがコクピットへ入つていく。その表情には悲壮感さえ漂い、刹那とキラはそれ以上言葉をかけることができなかつた。

「ふむ。ファーストニュー・タイプのアムロ・レイと黒歴史の遺産を操るロラン・セックか。悪くない」

サンドマンが静かに微笑む。そして、新たなゲートが闘技場に出現する。

「君たちにもつとも相応しい戦場を用意した。さて……これで勝利を決められるかな？」

サンドマンの言葉には追い詰められた様子はない。むしろ、アムロたちの健闘をたたえるような色さえつかがわせていた。

そんなサンドマンのことなど気にせず、アムロはゲートを見つめる。そして、モニターに写るロランへ無言でうなづく。

「行くぞロラン」

「はい！ アムロさん！」

ニュー・ガンダムとターンエーが動き出す。残された刹那とキラはゲートへ消えていく2機を祈るような気持ちで見送っていた。

「！」は……」

眼前の風景を見て、アムロが息を呑む。

2人の前には真っ白な岩肌が延々と広がっていた。植物など陰もなく、ただ無骨な荒野とクレーターだけが地平線まで続いている。「月面……静かの海のあたりです」

月で生まれたムーンレイスであるロランがつぶやく。故郷へ戻つた感概はない。懐かしいはずの月面は、今の彼には死の大地に見えている。

「ここが次の戦場か……」

アムロが周囲を見回す。対戦相手の姿はないが、ニュー・タイプの感覚が強烈なプレッシャーをアムロに知らせていた。「どこにいる？」

「アムロさん！」

ロランの声にアムロの視線が動く。クレーターの向こうで巨大な閃光が見えた。アムロはすぐさまニュー・ガンダムを飛び立たせ、閃光の方角へと向かった。

「あれは！」

「ギンガナム艦隊！」

クレーターの向こうでは、戦闘が繰り広げられていた。それはムーンレイスの中でも好戦派で知られるギンガガナム家の宇宙艦隊の交戦を示す発光であつた。

「くつ！」

ギンガナム家の艦艇が閃光に変わる。ロランはあわてて通信回線を開き、ギンガナム艦隊との交信を試みた。

数秒の後、スクリーンにギンガナムの顔が映る。コクピットの中らしく、時折閃光が彼の顔を明るく照らし出していた。

『おお、ロラン・セアックではないか！』

「ギム・ギンガナム！ 何をやっているのですか！」

ロランの言葉にギンガナムが歯をむき出して笑つた。

『決まつてあるつ。これが戦争というものだ』

ギンガナムの言葉を聞いてもロランは意味が理解できなかつた。会話している間にもギンガナムの顔が白く照らし出される。苦戦を強いられているのだけは確からしい。

「僕らがここに来たのは！」

『わかつてある。貴様らが地球の代表として戦つておるのはな。しかし、小生はギム・ギンガナムだぞ！ 月の武を司るのは小生であるよ！』

獣じみたギンガナムの表情にロランは言葉を失つた。ギンガナムは一瞬楽しげな顔を見せる。

『月で闘おうと/or/いうヤツらには、まず我らが相手をする！ そこで見ておれ、ロラン・セック！ アムロ・レイ！』

「ギンガナム！」

アムロが思わず叫ぶ。ギンガナムは別れを告げるように笑うと、回線を切つた。

スクリーンにはギンガナムが乗つてゐるであらうターンXが見えた。ターンXは周囲のモビルスーツ部隊を率いて、虚空を飛ぶ何かに攻撃を仕掛けていく。

「あれは……？」

真紅の翼をもつた漆黒のロボットが目もくらむ光を放つ。回避の遅れた数機のモビルスーツが光に巻き込まれて爆発する。

「まだいる！」

アムロの感覚が高速で飛ぶ物体をとらえた。それは3機の戦闘機のような物体で、それらが次々とモビルスーツたちを破壊していく。

『よう……アムロ・レイ』

「貴様は！」

いきなり通信回線が開き、男の声が入つてくる。それはジャブローにメッセンジャーとして乗り込んできた神隼人のものだつた。

『とんだ邪魔が入つたものだな。待つていろ、すぐに力タをつける。竜馬！ 弁慶！ そろそろ行くぜ！』

『わかつてある。貴様らが地球の代表として戦つておるのはな。しかし、小生はギム・ギンガナムだぞ！ 月の武を司るのは小生であるよ！』

『了解！』

「ま、待て！」

アムロの制止を無視して、3機の戦闘機はさらに加速をかける。直線に並んだ3機は一瞬で巨大なロボットに姿を変えた。

『見たか！ こいつが真・ゲッターだぜ！』

今度は陽気な男の声が回線に割り込んできた。ヘルメットの中から勝気そうな視線を向け、男はいたずらっぽく笑う。

『オレの名は兜甲児！ そして、こいつがオレの相棒マジンカイザーだ！』

男の声とともに黒いロボットが閃光を放つ。今度はギンガナム艦隊の艦艇がビームシールドを破壊されて爆沈する。

「真・ゲッター……」

「マジン……カイザー……」

2体のスーパー・ロボットの威力を目の当たりにして、アムロとランは背筋に冷たいものを感じていた。

第16話「月光蝶」

「いぐぞロラン！」

動いたのはアムロが先だつた。 ガンダムは月面を蹴ると、まつすぐにギンガナム艦隊を襲う2体へと向かっていく。 ロランはあわててターンエーを起動させ、アムロの後を追つた。

『来るなと言つたぞ。 ガンダム！』

ギンガナムのターン？ がアムロの行く手をさえぎる。 自軍が壊滅しようとしている中でも、ギンガナムは楽しげな笑みを浮かばせていた。

「そんなことを言つている場合か！ どけ、 ヤツらの相手はオレたちがする！」

『それは聞けんのだよ。 アムロ・レイ』

いきなりターン？ がビームを放つ。 アムロは難なくそれをかわすが、 ギンガナムの意図がわからず混乱していた。

『月面は我らの領土。 そこを侵されておいて、 高見の見物というのはできん相談なのだ！』

『何をゴチャゴチャ言つてやがる！』

アムロとギンガナムの会話に甲児が割り込む。 また艦艇を撃破したマジンカイザーが左腕を2機に向ける。

『ターボスマッシュヤーパンチ！』

甲児の掛け声とともにマジンカイザーの拳が飛び、 回転しながら飛ぶ鋼鉄の拳に、 アムロとギンガナムは同時にビームを放つた。

『な！』

高速回転する拳がビームを四散させる。 相手の装甲の強固さを悟り、 アムロは機体を上昇させて拳をかわそうとした。

『甘いぜ！ こいつをくらえ！』

マジンカイザーの胸が赤くなる。 そこからほどばしつた熱線がまっすぐに ガンダムへ襲い掛かる。

「ええい！」

回避が間に合わないことを感じたアムロは、ガンダムの背面に装備されたフィン・ファンネルを射出する。ファンネルは一瞬で四方に展開すると ガンダムを中心としたバリアを張る。

しかし、ビーム攻撃をはじくはずのファンネルのバリアがあつさりと破壊される。展開した? フィールドが乱れ、熱線は勢いを変えずに ガンダムを目指した。

「くそ！」

「アムロさん！」

出遅れたロランが絶叫する。光に飲まれつつあるアムロは、敗北を確信して唇をかみしめる。

『諦めるのは根性のない者の証拠だぞアムロ・レイ』

「ギンガナム！」

熱線と ガンダムの間にターン？が割り込む。ターン？は両手を広げると熱線を正面から受け止め、 ガンダムを直撃から守った。

「なんてことを！」

『言つたはずだぞ。高見の見物はできんとな！』

マジンカイザーの放つた熱線ファイアーブラスターの前に、徐々にターン？の装甲が融解していく。しかし、ギンガナムは笑みを崩さなかつた。

『これでわかつたはずだ！ こやつらの力は！』

「！」

ギンガナムの言葉にアムロは彼らの真意を悟つた。ギンガナムたちはアムロたちにスーパー・ロボットたちの実力を知らせるため、あえて戦つたのである。

『少々癪だが、我らではヤツらの相手は役者不足のようだ。お前らにゆずつてやるうと誓つのだよ』

「ギンガナムさん！」

光の中に消えていくギンガナムは、ロランの声に田を見開き絶叫する。

『兄弟よ！ ターンタイプの力を思う存分見せてやるがいい！ ガンダムならば時代を切り開けるというものだあああ！』

「ギンガナム！」

ターン？ が閃光に消える。気がつけばギンガナム艦隊はほぼ壊滅し、わずかな残存戦力も後退を開始していた。

『これで前座は終わりのようだな』

甲児の言葉にアムロもロランも答えない。ただ、宇宙を漂つターン？ の残骸を見つめているだけだつた。

「また、無用の犠牲が出た……みんなオレのせいだ」

「アムロさん……」

「行くぞロラン」

「？」

ロランは眼前の ガンダムの様子が変わったのに気づく。機体の表面がうつすらと光を放ち、金色の燐光が漏れ出す。

それは ガンダムに使用されているサイコフレームの引き起こす現象であった。アムロのニュータイプとしての力がサイコフレームをオーバーロードさせているのだ。

「この戦いで決めるぞ。長引かせればこちらが負ける。勝負は一瞬だ」

「……はい」

決意のこもったアムロの声にロランがうなずく。眼前には彼らの乗るガンダムの倍以上もある真・ゲッターとマジンカイザーが待ち受ける。

『さあて、おっぱじめようぜ！』

『手加減はしないぞ。アムロ・レイ、ロラン・セック』

2大スーパー口ボットを前に、アムロたちはスロットルを倒す。2機のガンダムは咆哮のようなバーニア光を放ちながら、強敵へと突進していった。

『ゲッタアアアアビィィィィム！』

光の奔流をガンダムたちがかわす。その回避方向へマジンカイザ

一の鉄拳が放たれる。

『ターボスマッシュ・シャーパンチ!』

「くつ！」

強烈なGに耐えながら、アムロは機体を制御する。シールドでガードして防げる破壊力ではない。一撃くじりつことが敗北へと繋がる危険な相手だった。

「フィン・ファンネル！」

ガンダムの背部に装備されているフィン・ファンネルが切り離される。アムロの脳波を感じて動くビーム兵器は、スズメバチの乱舞の「」とく銳く軽快にマジンカイザーへ襲い掛かる。

『この程度の豆鉄砲で、カイザーを倒せるもんかよ！』

超合金ニユーズで固められた鉄壁の装甲は、フィン・ファンネルの放ったビームをよせつけない。兜甲児は余裕を見せてニヤリと笑い、目標の姿を追つた。

『！』

ガンダムの姿がない。いつの間にか視界から消えていたのだ。甲児はさきほどファンネルがただの陽動であることに気付き、一瞬で緊張する。

『そこ！』

長年の戦闘で磨いた動物的本能が気配を捉える。頭上に膨らむ殺氣を感じた甲児は、ルストトルネードでこれを攻撃した。

『何？』

そこに浮かんでいたのは ガンダムのハイパー・バズーカだけであった。遠隔操作で発射されようとしていたバズーカを一瞬でサビに変えたものの、敵の姿は見えない。

「ひつかかってくれたか！」

『くそお！』

本物の気配は背後だった。頭上へ意識を集中していた甲児の反応が遅れる。アムロは ガンダムのビームサーベルを引き抜き、マジンカイザーのスクランダーめがけて突きたてようとした。

『忘れてもらっちゃ困るぜ…』

「！」

飛翔するトマホークが、ガンダムをかすめる。アムロの超人的な反射神経がなければ両断されていたスピードである。真・ゲッターの姿を横目に、アムロは軽く舌打ちをする。

『すまねえゲッターチーム！』

『手ごわい相手だ！一気に仕留めるぞ！』

マジンカイザーと真・ゲッターが、ガンダムを目指す。それを見てアムロは軽く微笑んだ。

「今だ口ラン！」

「はい！」

『！』

2体のスーパー口ボットが背後を向く。そこには虹色の翅を広げたターンエーが両腕を広げていた。

「これ以上、黒歴史を刻ませはしません！」

龍馬はその姿を見てアムロの意図に気付いた。アムロは自分たちを1つの場所に集めるための囮だったのだ。

ターンエーの持つ最大最強の兵器月光蝶が広がっていく。ナノマシンによって形作られた翅は、触れるものすべてを灰燼へと帰す悪魔の兵器である。その翅が2大スーパー口ボットへ襲い掛かる。

『ちいいいい！』

『カイザー！もつてくれよ…』

マジンカイザーの胸から光があふれだす。それと同時に真・ゲッターも光へと姿を変える。作戦は1つだけ。最大の武器でナノマシンを焼き尽くし、脱出するしかない。

閃光と月光蝶がぶつかり、すさまじいエネルギーが荒れ狂う。口ランはターンエーで、ガンダムを救出すると、祈るような気持ちで光の巻を見守った。

第17話「衝撃！ 進化の果て」

『やつたか……』

月光蝶の虹色が完全に2体を包み込む。ガンダムの武装を考えてもこれで倒せなければ勝利する手段は皆無に等しい。収束していく光を見つめて、アムロたちは固唾を呑む。

『やつて……くれるじゃねえか……』

『！』

光の中から禍々しいシルエットが浮かび上がる。片腕が消え去り、翼を失つてはいるものそれは紛れもなく魔神皇帝の雄姿と留めている。

『こんなもんでカイザーを倒せると思ったかよ。ガンダムの兄ちゃんたち』

『深刻なダメージを受けてはいるものの、マジンカイザーはまだ動いていた。甲児は僚友の無事を確かめるために横を見やり、そして眼を見開く。

『ゲ、ゲッター……』

『逃げる甲児くん……』

甲児が見たのは見慣れた真・ゲッターの姿ではなかつた。悪魔じみたシリエットをもつていた真・ゲッターは、さらに異形の姿へと変貌し、さらに巨大化を続けていく。

『どうしたんだよ。龍馬くん！ 隼人、弁慶！』

『ゲッター線だ！ 最大出力で撃つたストーナサンシャインでゲッター線が暴走しちまつた！』

『こいつはやばいぜ！ 兜！ 気をつけろよ』

慌てた弁慶の言葉と冷静な隼人の声を聴いて、甲児はことの恐ろしさを知る。今だ解明されていないゲッター線が月光蝶とストーナサンシャインの激突で刺激され、暴走したのだ。

『！』

すでに数百メートルに巨大化した真・ゲッターの目がこちらを向く。そして、巨大な手がマジンカイザーを捉えようと伸びてくる。

甲児はそれをかわし、戦闘体勢を整える。

さすがのマジンカイザーでも暴走した真・ゲッターを相手にするのは厳しい。全力でぶつかっても勝てる自信はない。

「どうしたことだ！仲間割れか！」

アムロの声に甲児が舌打ちをする。背後に2機のガンダムがいては真・ゲッターに集中できない。甲児は絶望的な気分に陥り、唇をかみ締める。

「どうしたんですか？あの機体の様子がおかしい」

ロランの声も聞こえてくる。その間もゲッターは巨大化を続け、原型を留めなくなりつつあった。
(このままじゃ……)

ゲッター線の恐ろしさはその同化能力にある。巨大化したゲッターは月を喰らい、やがては地球へと触手を伸ばすかもしれない。そうなつては甲児たちの計画は何の意味もなくなる。

『ガンダムの兄ちゃんたち！すぐにここを離れろ！』
ゲッターが暴走しちまった。オレが何とかする！』

「何だと？」

アムロは異形へと化した真・ゲッターを見上げる。すでにどこが腕か足かわからなくなり、無数の顔が現われては消えていく。その異様さにアムロは背筋を凍らせる。

『さつさと行きやがれ！てめえらの勝ちでかまわねえよ！』

そう叫んで甲児はマジンカイザーを突進させる。ゲッターの放った触手をカイザーブレードで切り飛ばし、胸部からファイアプラスターを放つ。ゲッターの頭部がいくつか吹き飛ぶが、それも一瞬で再生する。

『ちつ！さすがだぜ真・ゲッター！』

舌打ちをする甲児を震動が襲う。切り飛ばされたはずの触手がゲッターの姿となり、マジンカイザーの両腕へと絡みつく。不意打ち

を受けた甲児はすぐに振りほどこうとするが、マジンカイザーのパワーをもってしても容易に振りほどけない。

『くつそお！』

「フィン・ファンネル！」

思いもよらない声が響く。甲児は分裂ゲッターたちがビームに焼かれ消滅していくのを見つめ、呆然とする。そこにはライフルを構えた ガンダムとターンエーガンダムがいた。

『お前ら……』

「援護する！ こいつを月に落とすわけにはいかない！」

「これ以上の損害を出すわけにはいかないんです！」

迫りくる触手たちを迎撃しつつ、2機のガンダムがマジンカイザーをフォローする。その光景を見て、甲児の目に光が戻る。

『へへへ、生まれた場所は違つても、地球を守りたい気持ちは一緒つてわけかい』

「……なんだ？ どういフ……」

『行くぜガンダム！ 久しぶりの共同戦線だ！』

アムロの言葉を待たずにマジンカイザーは巨大ゲッターへと突撃する。考えるヒマもなくアムロたちもその左右について、ゲッターへと接近した。

「勝算はあるんですか？」

『そんなもん、わかんねえよ！』

『……相変わらず……無鉄砲なヤツ……だな』

『！』

途切れ途切れだが龍馬の声が通信回線に飛び込む。仲間の無事を知り、甲児の顔が一気に明るくなる。

『無事だつたのか龍馬くん！ 今助けてやるからな！』

『……頼むぜ相棒……よく聞けよ』

隼人の声である。彼らゲッターチームはこの巨大ゲッターの中で生きているのだ。

『手が……ひとつだけある……さっきのガンダムの攻撃。あれをぶ

つける』

『え?』

ロランが聞き返す。途切れ途切れの通信の中で隼人が言葉を続ける。

『真・ゲッターのゲッター線をナノマシンで包み込むんだ。さつきはマジンカイザーの援護があつたから耐えられたが、真・ゲッターだけなら包み込めるかもしれん』

『そ、それで、お前らは?』

ゲッターチームからの答えはない。その意味を知り、甲児は唇をかむ。

『現在もこいつはゲッター線を吸収し続けている。早くしないと手遅れになるぞ』

『……わかつたぜ!』

甲児の両目に決意の炎がともる。操縦者の覚悟に呼応するようにマジンカイザーのエンジンがさらに回転数を上げた。

『そういうことだガンダムたち!』

「しかし…」

甲児の顔を見てアムロは言葉を切る。勝つために誰かが犠牲にならなければならない。甲児の目はそうアムロに伝えていた。

「ロラン、作戦は同じだ。オレたちがアイツの注意をひきつけるから、月光蝶でどどめをさせ」

「……了解……しました」

『できるだけダメージを与えるんだ。再生に大量のゲッター線を使わせれば、それだけナノマシンがきくようになる』

『おそらくこれがオレたちの最後の通信だ』

『頼んだぜ甲児くん。そして、ガンダムたち』

『あばよ』

ゲッターチームからの通信が途切れる。甲児がアムロがロランが

決意の眼差しで巨大化する真・ゲッターを見上げる。

『すまねえな。せっかくの対決がこんなことになつて』

「謝罪の言葉は後にしてくれ。今は……」

「コイツを止めるだけです！」

マジンカイザーが咆哮をあげる。 ガンダムが宇宙を駆ける。 ターンエーが飛翔する。 3機を迎撃とうと、 ゲッターは無数の触手を放つた。

『おつと、 お前の相手はオレたちだぜ！』

「この程度の攻撃で！」

マジンカイザーの熱線が次々と触手を焼きさる。 ガンダムの正確な射撃はゲッターの巨体に生まれる異形の頭部を次々と吹き飛ばしていくた。

『ファイアーブラスター！』

甲児の叫びとともに熱線がゲッターの表面に巨大なクレーターを作り上げる。 すぐさま再生を開始するゲッターだが、 そこに ガンダムの猛攻が突き刺さる。

「やらせるか！」

初めてのコンビネーションとは思えない息の合った戦いぶりであった。 戰艦の主砲を上回るゲッタービームの乱射をかわしながら、 マジンカイザーと ガンダムは確実にゲッターに痛撃を『えていく。』

『フィン・ファンネル！』

ターンエーに迫る触手を ガンダムのフィン・ファンネルが打ち抜く。 操縦技術に秀でていないロランには、 弹幕のような攻撃はかわしきれない。 ターンエーの攻撃準備が整うまで、 アムロと甲児が自らを盾にするつもりであった。

「おおおおお！」

同時に四本の触手がターンエーを目指す。 どうやらゲッターの意識がターンエーの危険度を認識したようであった。 ターンエーに集中する攻撃を防ぐべく、 マジンカイザーは触手の前にたちはだかる。

『ファイアーブラスター！』

熱線の奔流が触手を焼き尽くす。 ゲッターの猛攻を食い止めるマジンカイザーの勇姿は、 まさに鉄の城であった。

「なつ！」

蒸発していく触手の間から新たな触手が伸びる。不意打ちを受けた甲児はかわすヒマもなく、触手に捉われる。

「カイザーが！」

「甲児くん！」

すぐに救出しようとアムロだが、マジンカイザーが片手でそれを押しとじめる。通信回線のモニターに甲児の笑みが写った。

『大丈夫だぜアムロさんよ。これで多少は……時間が稼げらあ！』

ゲッターの触手が胴体が閃光を吹き上げる。取り込まれつつあるマジンカイザーが内部へファイアーブラスターを放つたのだ。まるで鮮血のように光を撒き散らしながら、巨大ゲッターが苦悶にのたうつ。

「でけえヤツには内部からの攻撃に限るってね」

「やりと甲児が笑う。しかし、アムロはそんな彼の表情に悲痛なものを感じた。

「……カイザーが」

ゲッターから脱出したマジンカイザーの姿は悲壯であつた。半分吸収されつつあつたためにゲッターへのダメージを自らも食いつこうになつてしまい、その半身を吹き飛ばされてしまつていた。

「へっ、こんなもんツバつけとけば大丈夫だぜ……」

虚勢であることはわかつっていた。だが、ゆつくりと再生していくゲッターを前に甲児をいたわるヒマはない。アムロは決意を秘めた表情で、起き上がるゲッターをにらみつける。

「あとはオレに任せてもうう！」

ガンダムがゲッターに攻撃をしかける。しかし、ガンダムの攻撃力ではゲッターの巨体に致命傷を与えない。ビームが何発突き刺さろうともその傷は瞬時に再生していくのである。

『アムロさん！ ムチャだぜ！』

「ガンダムは……伊達じゃない！」

アムロと ガンダムが黄金の飛沫をはじけさせる。それは ガン

ダムに搭載されたサイコフレームのオーバーロードを叫ぶる光であった。

「なっ！」

「こんなもの ガンダムで！」

黄金の光を吐き出しながら ガンダムがさらに攻撃を続ける。魂のほとばしりともいえる攻撃を受け、ゲッターの再生速度が落ちていく。

「アムロさん離れてください！」

ロランの声がアムロの耳を叩く。見上げるとターンエーが虹色の翅を広げて接近してくるのが見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0223k/>

スーパーロボット対戦

2011年11月1日00時13分発行